

清 水 II 遺 跡
清 水 V 遺 跡
清 水 VI 遺 跡

—市営原市住宅団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007

群馬県安中市教育委員会

清水 II 遺跡
清水 V 遺跡
清水 VI 遺跡

－市営原市住宅団地建替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2007

群馬県安中市教育委員会

序

安中市は群馬県の西南部に位置し、碓氷川の流れに沿って存在する緑豊かな田園都市です。清水遺跡のある原市地区は中心部には、古代の東山道と中山道が通過し、その街道筋には杉並木や古い町並みも残された歴史的由緒ある場所です。その一方、現在は市内でも宅地化が進み人口が急増しており、市街化が進んだ地域もあります。

碓氷川と九十九川に挟まれたこの地域には、縄文時代から古代の集落跡、市内唯一の前方後円墳である篠瀬二子塚古墳、多数の人骨が出土した中世の首塚、榎下城等の遺跡が存在し、多数の遺跡が分布しています。今回、発掘調査を実施した清水遺跡は、老朽化した市営住宅団地の建替に伴うもので、縄文時代及び古代の集落跡と中世の窯址を中心とする瓦質陶器の製作に伴う遺構群が発見されました。隣接する原市第一県営住宅団地の建替工事でも、縄文時代と古代を中心とする集落が発見されており、遺跡が広範囲にわたることが明らかとなりました。

こうした発見された歴史の遺産は、私たちの祖先の歩んできた姿を映すものであり、郷土の歴史として将来へと残していく必要があります。そのためにも今回の成果が、郷土の歴史を学習するために活用されることを願う次第であります。

最後に、過酷な気象条件のもとで発掘調査に従事していただいた方々、調査に際して有益なご助言、ご指導をいただいた多くの方々には厚く御礼申し上げたいと存じます。

平成19年3月

安中市教育委員会
教育長 中澤 四郎

例　　言

1. 本書は安中市建設部が計画した市営原市住宅団地建替事業に伴う清水II遺跡（遺跡略称C-10）、清水V遺跡（遺跡略称C-14）、清水VI遺跡（遺跡略称C-16）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 清水遺跡は調査地点によって、市営住宅団地部分をII区・V区・VI区、県営住宅団地部分をI区・III区・IV区（遺跡略称C-9）として、調査地点をそのまま付して遺跡名とした。
3. 清水II遺跡と清水V遺跡の一部については、『安中市史』第4巻原始古代中世資料編に掲載されているが、その内容については本報告を優先とする。
4. 遺跡は安中市原市一丁目字清水、久昌寺西地内に所在する。
5. 試掘調査については補助事業として平成7・9・13年度国庫補助金、県費補助金により実施し、本調査及び遺物整理は市事業として安中市教育委員会が直営で実施した。
6. 調査期間及び担当者（調査時）
 - (1) 清水II遺跡（平成7年度）

試掘調査	平成7年4月20日～平成7年4月25日
発掘調査	平成7年4月26日～平成7年7月5日
遺物整理	平成7年7月6日～平成8年3月31日
担当者	社会教育課文化財係　主事　千田茂雄
 - (2) 清水V遺跡（平成9年度）

試掘調査	平成9年6月2日～平成9年6月30日
発掘調査	平成9年7月1日～平成9年9月2日
遺物整理	平成9年9月3日～平成10年3月31日
担当者	社会教育課文化財係　主事（文化財保護主事）　千田茂雄・主事補　井上慎也
 - (3) 清水VI遺跡（平成13年度）

試掘調査	平成13年5月24日～平成13年6月15日
発掘調査	平成13年6月18日～平成13年8月31日
遺物整理	平成13年9月1日～平成14年3月31日
担当者	文化振興課文化財係　主事　井上慎也
 - (4) 整理及び報告書作成（平成18年度）

期間	平成18年4月1日～平成19年3月30日
担当者	学習の森文化財係　主査（文化財保護主事）　千田茂雄（清水II遺跡）
同	主任（文化財保護主事）　井上慎也（清水V・VI遺跡）
7. 本書の編集は井上が行った。本文の執筆は千田（清水II遺跡）、井上（清水V・VI遺跡他）、縄文土器については松澤浩一氏（本庄市教育委員会）が執筆した。
8. 遺構図の作成及びトレイス等報告書作成は千田、井上、鬼形敦子、広上良枝、吉澤栄子、大月圭子、菅生陽子が行った。遺物の実測は、井上（土器の一部、縄文石器・鉄等）が行った。なお、清水II・V・VI遺跡の古墳及び古代の土器実測・トレイスと観察表の一部は（有）前橋文化財研究所に委託して実施した。また、縄文土器については松澤氏、中世全般については清水　豊氏（かみつけの里博物

館)の協力を得た。全体を井上が総括した。

9. 遺構写真の撮影は、千田、井上がり、航空写真是(有)青高館(清水II・V遺跡)、(株)フジテクノ(清水VI遺跡)に委託して実施した。遺物の写真撮影は井上が撮影し、清水II遺跡の一部は、(有)前橋文化財研究所に委託して行った。

10. 基準点・水準点の測量及びグリッド杭の設定は(株)大成測量に委託して実施した。

11. テフラ分析等の自然科学分析は(株)古環境研究所に委託して行った。

12. 発掘調査の記録、出土遺物等は安中市教育委員会が保管している。

13. 発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します(敬称略・順不同)。

大工原 豊 清水 豊 長井正欣 秋本太郎 日沖剛史 関根慎二 谷藤保彦 松澤浩一
三浦京子 折館伸二 外山政子 坂爪久純 大江正行 木津博明 坂井 隆

14. 調査組織は以下のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長 真下 仁(平成7年度) 阿久津浩司(平成9年度)

鈴木 勝(平成13年度) 佐藤伸太郎

社会教育課長 多胡泰宏(平成7年度) 横田道夫(平成9年度)

文化振興課長 大野孝一(平成13年度)

学習の森所長 大野孝一

文化財係 係長 杉山 弘(平成7年度) 佐藤輝男(平成9・13年度) 藤巻正勝

主査 萩原由子(平成13年度) 蜂須賀まゆみ

主査(文化財保護主事) 壁 伸明

主査(文化財保護主事) 千田茂雄(調査担当)

主任(文化財保護主事) 大工原 豊(平成7・9年度)

主任(文化財保護主事) 深町 真

主任(文化財保護主事) 井上慎也(調査担当)

発掘調査・遺物整理従事者(順不同)

平成7年度

浅川たけ子 漆原高司 中島 芳 中島秀雄 原田加代 儿玉宏子 氏家芳子 稲葉恵美子
金井 武 田島一雄 高橋とく子 高橋トシ江 森田洋子 古立真理子 神宮幸四郎 山田一夫
稲葉恵美子 田中利策 清水 正

平成9年度

戸塚里子 磯貝多加夫 萩原みつ江 漆原高司 儿玉宏子 矢島柳子 中島 芳 吉田和雄
鶴田紀義 竹田昭子 多胡わぐり 萩原真里子 潟本志づ子 本間幸子 田中利策 清水 正
大手弓子 田島せい子 吉澤栄子 高瀬敦子 上原由美子 高林直美 小川久美子 安川節子
寺崎ひろ子

平成13年度

小林専八 遠間宰吉 萩原治枝 半田あい 田島かつ子 田島マチ子 戸塚里子 吉田和雄
田島せい子 矢島柳子

凡　　例

1 遺構の実測図は1/80を基本としたが、遺構の大きさにより1/40、1/100、1/160とした。

2 遺構図中の北マークは磁北である。

3 遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

縄文土器：1/4 土師器・須恵器・中世土器：1/4 縄文石器：2/3・1/2（小形）、
1/4（大形）、石製品・土製品・鉄製品：1/2・1/4・1/8

4 遺物実測図のスクリーントーンは环外面はススの範囲を示す。●は須恵器を示す。

5 土層説明中での記号、略称は次のとおりである。

土層名称及び量の基準：新版標土色帖による。

色調<：より明るい方向を示す（暗<明）

しまり、粘性 ○：あり ○：ややあり △：あまりない ×：なし

混入物の量 ○：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%）

※：若干（1～3%）

混入物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）

Y P：板鼻黄色輕石

6 ピットの深さ ○ 0～19cm ● 20～39cm ■ 40～59cm ▽ 60cm以上

7 縄文石器及び石材名については、安中市の分類による（大工原1998『中野谷松原遺跡』ほか）。

8 時代呼称について 本報告では古墳時代終末期から奈良時代にかけての集落跡が検出されている。

この時期の名称については、考古学的区分では古墳の時期による区分により「古墳時代終末期」、歴史学的区分では「飛鳥時代」、また、一部で律令制が導入確立される時期として「律令期」といった同じ時期を異なった名称で呼称される。本報告では、この時期について便宜的に「律令期」として用語を統一した。

9 時期区分 本報告では時期を時代別により3期に区分した。

I期（7世紀後半～8世紀初頭：律令期）

II期（8世紀代：奈良時代）

III期（9世紀代：平安時代）

目 次

口絵

序

例言

凡例

目次

I 調査に至る経過	1	3 清水VI遺跡	75
		(1) 概要	75
II 調査の方法と経過	1	(2) 縄文時代の遺物	75
1 調査の方法	1	(3) 古墳～奈良時代の遺構と遺物	75
2 調査の経過	2	(4) 中近世の遺構と遺物	87
III 遺跡の地理的・歴史的環境	5	VI 成果と問題点	96
1 地理的環境	5	VII 自然科学分析	98
2 歴史的環境	6	1 清水VI遺跡の火山灰分析	98
IV 層序	8	2 清水VI遺跡における植物珪酸体分析	103
V 遺跡各説	9	遺物観察表	106
1 清水II遺跡	9		
(1) 概要	9	写真図版	
(2) 古墳～平安時代の遺構と遺物	9		
(3) 中世の遺構と遺物	26	報告書抄録	
2 清水V遺跡	41		
(1) 概要	41	付図1 清水V遺跡 全体図	
(2) 縄文時代の遺構と遺物	41	付図2 清水VI遺跡 全体図	
(3) 古墳～平安時代の遺構と遺物	53	付図3 清水遺跡調査区位置図	
(4) 中世の遺構と遺物	72		

挿図目次

第 1 図 調査区設定図	3
第 2 図 遺跡位置と周辺遺跡分布図	6
第 3 図 土層断面模式図・土層説明	8
第 4 図 清水Ⅱ遺跡 全体図	10
第 5 図 H-1号住居址実測図	13
第 6 図 H-2号住居址実測図	14
第 7 図 H-3号・H-4号住居址実測図	15
第 8 図 H-5号・H-6号住居址実測図	16
第 9 図 H-7号・H-8号住居址実測図	17
第 10 図 H-9号住居址実測図	18
第 11 図 H-10号住居址実測図	19
第 12 図 住居址出土遺物分布図(1)	20
第 13 図 住居址出土遺物分布図(2)	21
第 14 図 H-1号・H-2号・H-3号住居址出土土器実測図	22
第 15 図 H-4号・H-5号住居址出土土器実測図	23
第 16 図 H-6号・H-7号・H-8号・H-9号住居址出土土器実測図	24
第 17 図 H-10号住居址・グリッド出土土器実測図	25
第 18 図 K-1号窯址実測図	29
第 19 図 K-2号・K-3号窯址実測図	30
第 20 図 捩立柱建物址実測図	31
第 21 図 壁穴造構・井戸実測図	32
第 22 図 粘土採掘坑実測図	33
第 23 図 壁穴列実測図	34
第 24 図 土坑実測図	35
第 25 図 A区ピット群実測図	36
第 26 図 中世土器実測図(1)	39
第 27 図 中世土器実測図(2)	40
第 28 図 清水V遺跡 造構配置図	42
第 29 図 J-1号住居址実測図	44
第 30 図 土坑実測図	45
第 31 図 繩文土器実測図(1)	47
第 32 図 繩文土器実測図(2)	48
第 33 図 繩文石器組成	50
第 34 図 繩文石器実測図(1)	51
第 35 図 繩文石器実測図(2)	52
第 36 図 H-1号住居址実測図(1)	56
第 37 図 H-1号住居址実測図(2)	57
第 38 図 H-2号住居址実測図(1)	58
第 39 図 H-2号住居址実測図(2)	59
第 40 図 H-3号・H-4号住居址実測図	60
第 41 図 H-5号住居址実測図	61
第 42 図 H-6号住居址実測図	62
第 43 図 HT-1号権立柱建物址・壁穴状造構実測図	63
第 44 図 集石・土坑実測図	64
第 45 図 H-1号住居址出土土器実測図(1)	66
第 46 図 H-1号住居址出土土器実測図(2)	67
第 47 図 H-1号住居址出土土器実測図(3)	68
第 48 図 H-2号住居址出土土器実測図	69
第 49 図 H-4号・H-5号住居址出土土器実測図	70
第 50 図 H-6号住居址・土坑出土土器・その他の遺物実測図	71
第 51 図 KM-1号窯址実測図	73

第 52 図	KM-1 窯址出土土器実測図	74
第 53 図	清水Ⅵ遺跡 遺構配図	76
第 54 図	H-1 号・H-2 号住居址実測図	78
第 55 図	H-2 号住居址実測図	79
第 56 図	H-3 号住居址実測図	80
第 57 図	H-4 号住居址実測図	81
第 58 図	H-4 号・H-5 号住居址実測図	82
第 59 図	H-1 号・H-2 号・H-3 号住居址出土土器実測図	84
第 60 図	H-3 号・H-4 号住居址出土土器実測図	85
第 61 図	H-5 号住居址・土坑出土土器・その他の遺物実測図	86
第 62 図	桜下城跡張図	89
第 63 図	T-1 号堅穴建物址・I-1 号井戸実測図	90
第 64 図	地下式土坑・土坑実測図	91
第 65 図	E区ピット群実測図	92
第 66 図	M-1 号・M-2 号西溝実測図	93
第 67 図	M-2 号中央・M-2 号東溝実測図	94
第 68 図	溝実測図・I-1 号井戸出土遺物実測図	95

表目次

第 1 表	遺跡一覧表	7
第 2 表	古墳～平安時代遺構觀察表	12
第 3 表	飛文時代遺構觀察表	43
第 4 表	古墳～平安時代遺構觀察表	55
第 5 表	古墳～奈良時代遺構觀察表	77
第 6 表	中世遺構觀察表	89
第 7 表	清水Ⅱ遺跡 遺物觀察表(1)	106
第 8 表	清水Ⅱ遺跡 遺物觀察表(2)	107
第 9 表	清水Ⅱ遺跡 遺物觀察表(3)	108
第 10 表	清水Ⅱ遺跡 遺物觀察表(4)	109
第 11 表	清水Ⅱ遺跡 遺物觀察表(5)	110
第 12 表	清水Ⅴ遺跡 遺物觀察表(1)	111
第 13 表	清水Ⅴ遺跡 遺物觀察表(2)	112
第 14 表	清水Ⅴ遺跡 遺物觀察表(3)	113
第 15 表	清水Ⅴ遺跡 遺物觀察表(4)	114
第 16 表	清水Ⅴ遺跡 遺物觀察表(5)	115
第 17 表	清水Ⅵ遺跡 遺物觀察表(1)	116
第 18 表	清水Ⅵ遺跡 遺物觀察表(2)	117
第 19 表	清水Ⅵ遺跡 遺物觀察表(3)	118

I 調査に至る経過

平成5年7月安中市都市施設課(当時)より市営原市団地建替の計画に係る照会が市教育委員会にあつた。該当地域は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、開発範囲が広範囲にわたることから埋蔵文化財の存在が予想されたため、市施設課との埋蔵文化財への対応について再三の協議を行った。しかし、既存住宅の老朽化が進み、強く建替の必要性が求められていたため、万一、遺跡が発見された場合、計画変更によって遺跡地を回避することは困難な状況であった。平成6年度には、群馬県教育委員会が、同地の県営住宅建替工事に伴い試掘調査を実施し、縄文及び古墳時代の遺構を発見し、本調査を実施した経緯もあることから、事業実施に先立ち、試掘調査を実施し、建替工事によって遺跡が影響を被る部分を対象として埋蔵文化財の発掘調査を実施することとし、記録保存の措置を講じることになった。

なお、事業計画ではA、B、Cの各ゾーンに区分けて実施することになっていたため、発掘調査も順次建替替えが開始される場所から実施することになり、Aゾーン（清水II遺跡）については平成7年度、Bゾーンについては平成9年度、Cゾーン（清水VI遺跡）については平成13年度に実施した。

なお、清水遺跡の調査については、隣接する原市第一県営住宅団地の建替事業に先立ち、群馬県教育委員会が主体となって平成6年度（I区）と平成8年度（III・IV区）に発掘調査を実施している（長井他1997）。

（千田茂雄・井上慎也）

II 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査区の範囲は、試掘調査の成果をもとに決定し、グリッドの設定を行った。グリッドについては從来から安中市の調査で用いられているとおり、100m×100mの大グリッドと4m×4mの小グリッドを併用する方法を採用了。グリッドは北西隅を基点とし、北から南へアルファベットでA、B、C…、西から東へ算用数字で1、2、3…、小グリッドをさらに2m×2mに4分割（アルファベットの小文字でa、b、c、d）と呼称した。また、グリッドの位置については国家座標（旧日本測地系）への取付を行った。なお、グリッドの設定は各調査地点毎に設定しているため、統一されたものではない。

発掘調査の方法及び手順は安中市で独自で採用している方法と從来の一般的な調査方法を併用した。

3遺跡とも基本工程はほぼ同じであるが、遺構の状態及び調査の進捗状況に対応して、適宜方法を変更して実施している。調査区の設定後、バックホーにより遺構確認面まで表土を掘削し、人力で遺構確認を行なった。表土除去後にグリッドを設定し、これをもとに遺構の記録と遺物の取り上げを行った。確認された遺構については、発見順に遺構名を付け、順次精査を実施した。住居址の調査と遺物の取り上げは、「分層16分割法」を基本とした。住居址以外の土坑等の遺構については、プラン確認後半裁し、断面図作成後完掘する方法を採った。土層断面図は從来の方法と「ビニール転写法」を併用した。調査した遺構については、適宜、土層断面、遺物出土状況、完掘状況等を35mmフィルムでリバーサルと白

黒の両方で写真撮影を行った。遺構完掘後、遺構測量と航空写真を兼ねて委託により気球及びラジコンヘリコプターによる撮影を実施した。遺構図の測量は気球及びラジコンにより、航空写真、ビデオ撮影したものをデジタルコピー機やパソコン等を用いて歪み補正した後、必要な縮尺で出力したもの、現地で確認しながら遺構図を作成した。なお、一部空撮後に検出された遺構や遺構の補足測量には平板測量により実施した。清水VI遺跡では堀の覆土の土壤分析を委託して行った。

遺物整理は遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・トレース・遺物観察表作成→写真撮影→図版作成の順に行い、並行して遺構図面の整理・作成→トレース→図版作成、写真整理（遺構・遺物）→写真図版作成の順で行った。縄文時代の石器の整理については安中市の分類（大工原1998）を採用した。

遺物写真撮影にはデジタルカメラ（Nikon COOLPIX775 200万画素）を使用した。また、遺構写真についてはネガをフィルムスキャニングしデジタルデータ化した。遺構及び遺物のトレースの一部、各種図面及び各種図版のレイアウトにはパソコン等の情報処理機器を使用し、デジタルデータ化した。

（井上慎也・千田茂雄）

2 調査の経過

清水II遺跡（平成7年度）

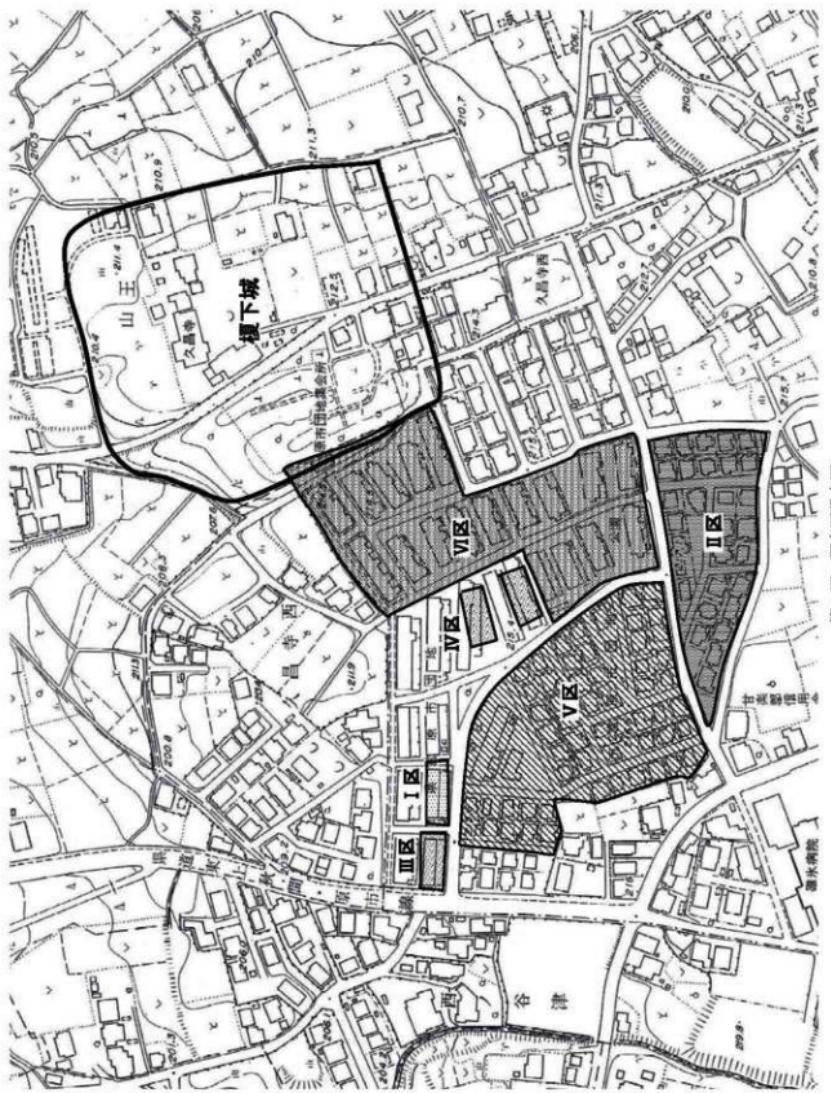
平成7年度は市営団地の建替部分（Aゾーン）を対象に発掘調査を実施した。事業区域内における遺跡の試掘調査は、平成7年4月20日から4月25日までの間実施した。試掘調査は事業区域内全体にトレレンチを設定して行った。精査した結果、古代と中世の遺構、遺物が検出されたため、当該期の遺跡が存在することが判明した。本調査は試掘調査に引き続き、平成7年4月26日から7月5日までの間実施した。発掘調査は遺構・遺物が確認された部分を中心に拡張して行った。

発掘調査の結果、奈良時代の集落と、中世の内耳鉢や鉢などを焼成した窯体及び粘土探査坑などを確認した。

遺物整理作業は遺物水洗、注記と図面整理の一部については発掘調査と並行して実施したが、本格的な遺物整理作業については、調査終了後、平成7年3月31日での間断続的に実施した。遺物実測・トレースについてはその一部を（有）前橋文化財研究所へ業務委託し、報告書作成作業は平成18年度に実施した。

清水V遺跡（平成9年度）

平成9年度は市営団地の建替部分（Bゾーン）及び市道改築部分を対象に発掘調査を実施した。事業区域内における遺跡の試掘調査は、平成9年6月2日から6月5日までの間実施した。試掘調査は建物予定部分と市道部分にトレレンチを設定し、精査した結果、縄文時代から中世に至る遺構、遺物が検出されたため、当該期の遺跡が存在することが判明した。本調査については、平成9年6月6日から9月2日までの間実施した。調査区は建物部分を北からA区、B区、C区、D区とし、市道部分をE区とした。発掘調査は特に遺構・遺物の密度が高いA区とC区について全面調査とし、他区に関しては遺構が発見された部分を拡張して調査範囲とした。A区では北に隣接するI区及びIV区（県営団地地点）と同時期の遺構が広がることが予想されたため、縄文時代と古墳時代の二面調査を実施し、縄文時代前期前半を主体とする住居址、土坑群、遺物集中地点、遺物包含層と古墳時代終末期（飛鳥時代）の住居址等が検



第1図 調査区段定図

出された。B区とD区では確認調査の結果、浅間B軽石の純層が安定して堆積し、その上部に遺構確認面（IV層上面）まで厚く黒色土が堆積する埋没谷を確認した。遺構はⅢ層中から集石が各1カ所したのみであったため、この部分を中心に調査を実施した。C区では、旧建物部分と重複していたため、遺構確認面まで搅乱が及んでいたため、遺物包含層は良好ではなかったが、古代の住居址と中世の窯址が検出された。中世の窯については、当初、性格不明の遺構として精査をしたが、II区（市営団地部分）において、中世の土器焼成窯が発見されていたことから、同様な遺構であると判断し、窯址として精査した。E区もC区と同様、土層の搅乱が著しいことと、表土の堆積が薄いことにより、遺構のみの確認であったが、古代の住居址と掘立柱建物址、ピット群を検出した。

遺物整理作業は遺物水洗、注記と図面整理の一部については発掘調査と並行して実施したが、本格的な遺物整理作業については、調査終了後、平成10年3月31日までの間断続的に実施した。遺物選別と遺物実測・トレースについては清水VI遺跡の分も含めて平成13年度に（有）前橋文化財研究所へ業務委託し、報告書作成作業は平成18年度に実施した。

清水VI遺跡（平成13年度）

平成13年度は市営団地の建替部分（Cゾーン）及び市道改築部分を対象に発掘調査を実施した。事業予定地は周辺部の発掘調査の成果と中世の榎下城に隣接することから、遺跡が存在する可能性が高いと判断されたため、試掘調査を平成13年5月24日から6月15日までの間実施した。試掘調査はV区と同様、建物予定部分と市道部分にトレンチを設定し、精査した結果、遺跡の密度は低いものの古代と中世を中心とした遺構、遺物が検出されたため、当該期の遺跡が存在することが判明した。本調査については、平成13年6月18日から8月31日までの間実施した。調査区は建物部分を南からA区、B区、C区とし、道路部分をD区、E区、F区とした。事業予定地の北側半分は榎下城に関連する遺構が検出される可能性が高いと判断されたため、建物予定地部分及び道路部分については、可能な限り全面対象とした。また、南側部分については、古代の住居址が、分布する範囲について本調査を実施した。発掘調査は遺構の時期により調査区の南側（A区、D区）と北側部分（B区、C区、E区、F区）に分けて実施した。南側部分については、古代の同時期の住居址が5軒検出されたが、他時期の遺構、遺物は検出されなかった。北側部分については、中世（戦国時代）の榎下城の外堀、堀（大溝）、竪穴建物、井戸、ピット群等の榎下城に関連する遺構群が検出された。調査の制約上、榎下城の外堀については部分的な確認調査であったが、山崎一氏の縄張図とのおり堀が存在することが発掘調査によって検証された。

遺物整理については、遺物水洗、注記と図面整理の一部については発掘調査と並行して実施したが、本格的な遺物整理作業については、調査終了後、平成14年3月31日までの間断続的に実施した。遺物選別と遺物実測・トレースについては清水V遺跡の分も含めて平成13年度に（有）前橋文化財研究所へ業務委託し、報告書作成作業は平成18年度に実施した。

（井上慎也・千田茂雄）

III 遺跡の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

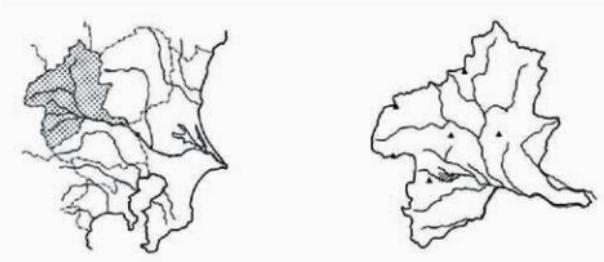
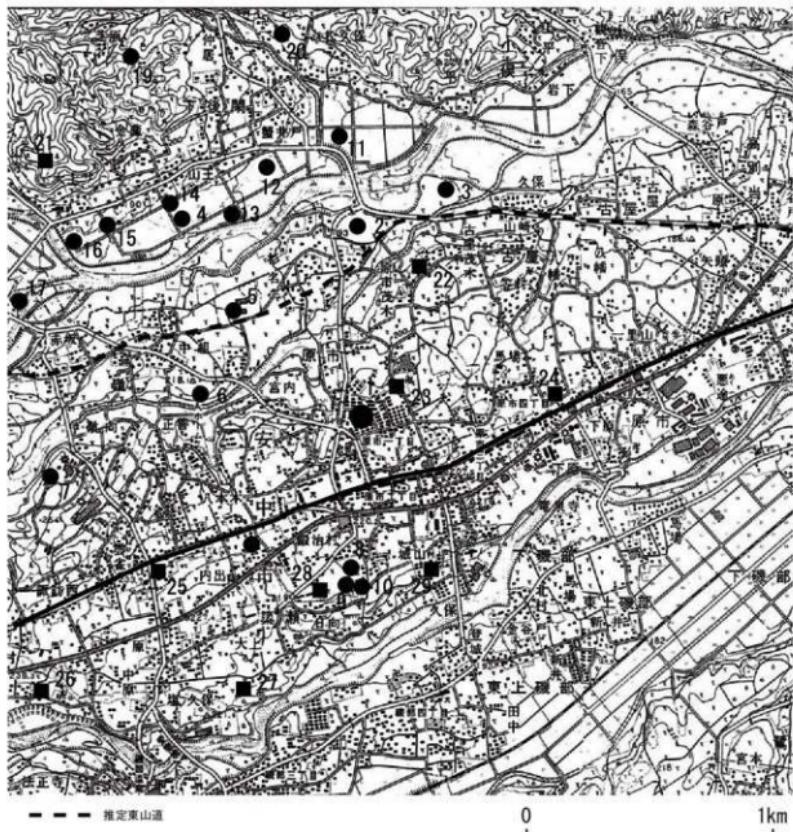
清水遺跡は、安中市原市一丁目に所在する。本遺跡は九十九川と碓氷川に挟まれた中位段丘面（原市・安中台地）に位置する。本遺跡が存在する段丘面は東西細長い台地で、この段丘には九十九川へと流れ八咫川が谷状の地形を形成し、段丘を南北に二分している。清水遺跡はこの八咫川へと緩やかに傾斜に差し掛かる場所に立地する（長井1996）。遺跡の標高は214～216mである。

2 歴史的環境

本遺跡は縄文時代前期から中世に至るまでの複合遺跡であり、縄文前期と古代の集落、中世（戦国時代）の土器生産に係わる工房と櫻下城の一部とその関連遺構が確認された。

ここでは清水遺跡とその周辺を中心に、発見された遺構・遺物について遺跡を時代毎に概観する。
旧石器時代では櫻木畠遺跡で遺物が採集されているが、遺跡として確認できるのは縄文時代に至ってからである。縄文時代の遺跡は前期～後期の遺構、遺物は草創期から後期までが発見されている。草創期前半では有舌尖頭器が杉名薬師遺跡と築瀬二子塚古墳で採集されている。集落遺跡では櫻木畠遺跡（前・中期）、清水I・III・V遺跡（前期）、鍛冶ヶ嶺遺跡（前期）等で確認されている。また、配石遺構が八幡平II遺跡（中・後期）で確認されている。弥生時代の遺跡は前期から後期までの遺物と後期の遺構を中心とした遺跡が発見されている。杉名薬師遺跡では中期前半から後半の遺物が出土しており、調査以前には道路側溝工事で中期後半の壺形土器が出土している。また、芝原遺跡でも同時期の土器が採集されている。後期から古墳時代初頭の集落遺跡は杉名薬師遺跡、高橋遺跡で確認されており、当該期の遺跡群の存在が明らかとなった。古墳時代の遺跡では中期から後期の集落遺跡として、杉名薬師遺跡、高橋遺跡、嶺・下原遺跡、櫻木畠遺跡等で確認されている。古墳では九十九川沿岸に後闇3号墳、本遺跡の南側に当地域では数少ない前方後円墳である築瀬二子塚古墳等が存在する。本遺跡の北側、杉名薬師遺跡周辺には後期を中心とした群集墳も存在し、集落遺跡との関係が認められる。律令期とされる古墳時代終末期では清水I・III・V・VI遺跡、櫻木畠遺跡、嶺・下原遺跡において集落遺跡が確認されている。また、奈良時代～平安時代では鍛冶ヶ嶺遺跡で官衙的色彩の強い大形掘立柱建物址群（奈良）が発見され、集落遺跡として清水II・V・VI遺跡、櫻木畠遺跡等、嶺・下原遺跡では平安時代まで続く鍛冶集落が確認されている。本遺跡周辺は古代東山道駅路の推定地であることから、これらの遺跡は東山道との関連性が窺えられる。九十九川沿岸では当時の生産基盤である浅間B軽石に覆われた水田跡が広範囲で確認されている。中世では清水II・V遺跡において、該期でも類例の少ない内耳鍋や鉢を焼成した窯跡とその工房跡が発見されている。中世城館址は安中忠政城とされる櫻下城（方形）等が存在する。清水VI遺跡では隣接する櫻下城の外堀と接続する堀跡の他に、城外で建物跡、地下式土坑等が確認されている。杉名薬師遺跡でも地下式土坑等の遺構が確認されている。近世以降、原市地区には台地を東西に横断する安中宿と松井田宿を結ぶ中山道が通過する。

（井上慎也）



第2図 遺跡位置と周辺遺跡分布図

遺跡名	旧 名	繩文				弥生			古墳				奈良	平安	中世	近世	備考
		草	早	前	中	後	晩		中	後	前	中					
1 清水 I ~ VI		*		◎	△	*	*	*	○	○	○	○	○	○	○	○	本報告
2 杉名薬師			*	*	*	*			○	○	○	○	○	○	○	△	集落
3 高橋									○	○	○	○	○	○	○	△	集落・古墳群
4 後閑3号墳									○	○	○	○	○	○	○	△	円墳
5 鎌・下原、同 II									○	○	○	○	○	○	○	△	鍛冶集落
6 櫻木塙	*			◎	○				○	○	○	○	○	○	○	○	集落
7 鍛冶ヶ嶺			○						○	○	○	○	○	○	○	○	集落・官衙構造
8 築瀬二子塙古墳	*				○	○				○	○	○	○	○	○	○	前方後円墳
9 築瀬首塙・古墳									○	○	○	○	○	○	○	○	円墳・板碑群
10 八幡平 II													○	○	○	○	配石・「築瀬炉跡」
11 広川													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
12 鍛冶屋													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
13 前原													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
14 山王前													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
15 宿路													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
16 町浦													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
17 深町													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
18 如来堂													○	○	○	○	平安水田(As-B下)
19 芝原													○	○	○	○	館址
20 北野寺																	館址
21 後閑城													○	○	○	○	館址
22 茂木東													○	○	○	○	館址
23 榎下城													○	○	○	○	砦
24 原市東館													○	○	○	○	
25 内出砦													○	○	○	○	
26 菖沼城													○	○	○	○	
27 龍山城													○	○	○	○	
28 八幡平陣城													○	○	○	○	
29 原市城													○	○	○	○	

◎: 大規模な遺跡（集落跡・古墳・城館址等）

○: 中規模な遺跡（住居跡・水田跡等）

*: 遺物が出土した遺跡

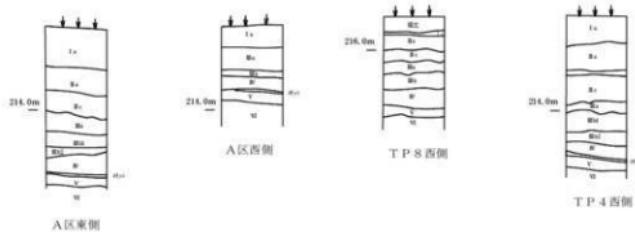
第1表 遺跡一覧表

IV 層序

清水遺跡は中位段丘（原市台地）に立地し、八咫川右岸の北斜面に位置する。土層の堆積は、概ね市内の基本層位と一致する。しかし、既存の団地建設によって土層はIV層下部まで著しく搅乱及び削平されていた。V区とIII区の間には、現況では平坦地であったが、調査のよって埋没谷が確認された。この部分の土層は、黒色土（Ⅲ層）が厚く堆積し、浅間B軽石の純層（Ⅱb層）も谷斜面に沿って堆積する場所も認められた。繩文時代の遺構は、IV層下部、古代の遺構はⅢ層中から検出された。

基本層序は、遺跡の中央部に位置するV区について掲載する。

(井上慎也)



層名	色調	しまり	粘性	混合物					備考
				R P	R B	Y P	A v - A	A v - B	
Ia 黒褐色土層		△	△				○	○	耕作土 A純層
Ib 灰白色軽石層	Ia < Ib	×	×						
IIa 黒色土層	Ib > IIa	△	○						
IIb 灰褐色軽石層	IIa < IIb	×	×						B純層
III 黒色土層	IIb > III	△	○						
IV 純褐色土層	IVa > IV	○	○	●					
V 純黄褐色土層	IV < V	○	○	○	○				上部にIVa 上部にVf+2 Y P純層
VI 褐色軽石層	V < VI	×	×				○	○	

第3図 土層断面模式図・土層説明

V 遺跡各説

1 清水II遺跡

(1) 概要

清水遺跡は先にも触れたように、県営・市営原市住宅団地の建替事業に伴い1994年～1997年にかけて県営住宅遺跡調査会（群馬県教育委員会）及び市教育委員会により発掘調査が実施された遺跡である。発掘調査は各年度箇所により清水遺跡Ⅰ～Ⅴ遺跡と呼称され、清水II遺跡は1994年に市営原市住宅団地の建て替え事業に伴い、市教育委員会により発掘調査が実施された部分である。発掘調査の結果、7世紀後半から9世紀前半にかけての集落と、中世（15世紀後半～16世紀）の内耳土鍋などの瓦質陶器を焼成した窯体及び製品製作のためと考えられる粘土採掘坑が確認された。また窯体と粘土採掘坑の周辺には、当該時期に属すると考えられる堀立柱建物址、柵列、竪穴状遺構、井戸などが検出され、製品製作のための工房と推測することが出来る。

(2) 古墳～平安時代の遺構と遺物

1. 遺構

住居址（第5図～第13図）

住居址が10軒検出された。各遺構ともに確認面からの堀込みも比較的深く、遺存状態は良好であった。各住居址の詳細については遺構観察表を参照願い、ここでは特徴的なH-9号住居址とH-10号住居址について触れておく。

両住居址共に、平面形が著しく長方形を呈する特徴を持つ。このような住居址は、安中市の『地尻遺跡・地尻II遺跡』（1991）の地尻遺跡H-1号住居址例がある。地尻遺跡では横長長方形になるが、貯蔵穴状の掘り込みの位置が共通している。

2. 遺物

各遺構からの遺物の出土量は比較的少なめであった。本報告書に掲載出来なかった遺物については、それぞれ遺物重量分布図で示した。本報告書掲載の遺物については、土器観察表を参照して頂き、ここでは各住居址毎を概観する。

H-1号住居址出土の土器（第14図）

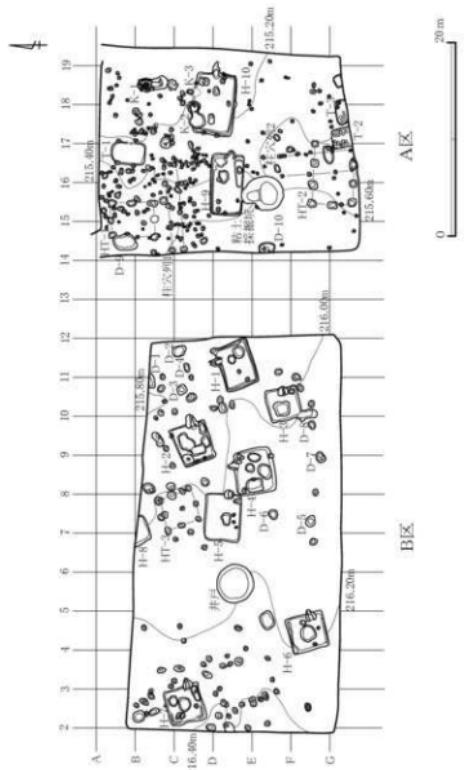
土師器壺・甕、須恵器蓋・甕などが出土した。遺物量は少なく、8世紀前半の時期と考えられる。

H-2号住居址出土の土器（第15図）

暗文土器の出土が特徴的であった。体部放射状暗文、底部螺旋状暗文の壺が検出された。この他、遺存状態の良好な土師器甕、須恵器高台壺が出土した。いずれの遺物も8世紀前半の時期と考えられる。

H-3号住居址出土の土器（第14図）

遺物の出土は少なかった。土師器壺と甕を中心検出した。7世紀後半の時期と考えられる。



第4図 清水II遺跡 全体図

H－4号住居址出土の土器（第15図）

出土遺物は少なかったが、遺存状態の良好な土師器甕が竈を中心に検出された。7世紀後半の時期と考えられる。

H－5号住居址出土の土器（第15図）

竈付近及び住居址下層からの遺物の検出が顕著であった。土師器よりも須恵器の出土が目立つ。9世紀前半の時期と考えられる。

H－6号住居址出土の土器（第16図）

遺存状態の良好な暗文土器が検出された。体部放射状暗文、底部螺旋状暗文の坏である。この他、土師器坏・甕・台付甕、須恵器坏・高台坏などが出土した。7世紀後半の時期と考えられる。

H－7号住居址出土の土器（第16図）

墨書の須恵器坏が1点出土した。文字は不明である。この他、土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏などが出土した。8世紀前半の時期と考えられる。

H－8号住居跡出土の土器（第16図）

住居址一部分のみの確認で遺物はほとんど出土しなかった。土師器坏1点のみ掲載した。8世紀前半の時期と考えられる。

H－9号住居址出土の土器（第16図）

多くの遺物が出土したが、そのほとんどは切り合い関係にある粘土探掘坑の遺物である。土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・高台坏などが出土した。8世紀後半の時期と考えられる。

H－10号住居址出土の土器（第17図）

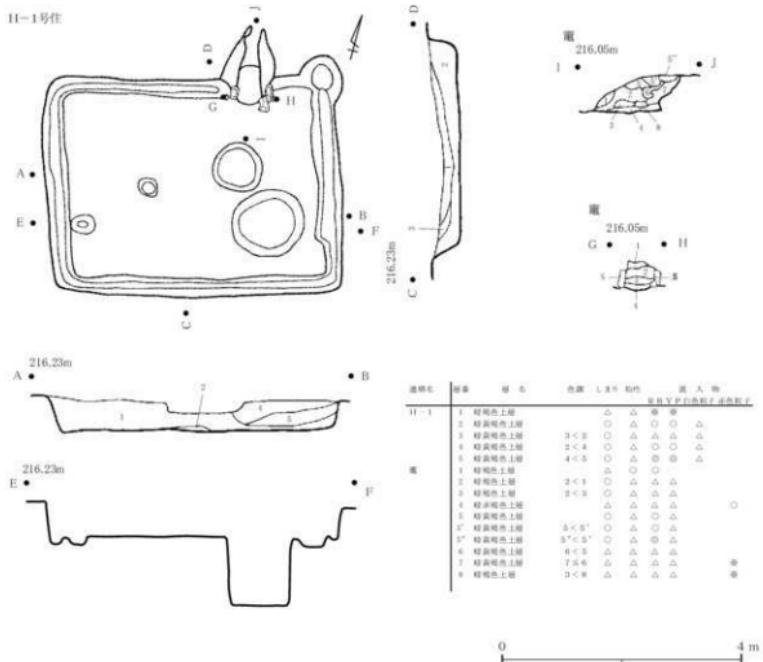
今回一番多くの遺物が出土している。須恵器坏の出土が多く、墨書も2点検出された。この他、土師器坏・甕、須恵器椀・甕が出土した。9世紀前半の時期と考えられる。

（千田茂雄）

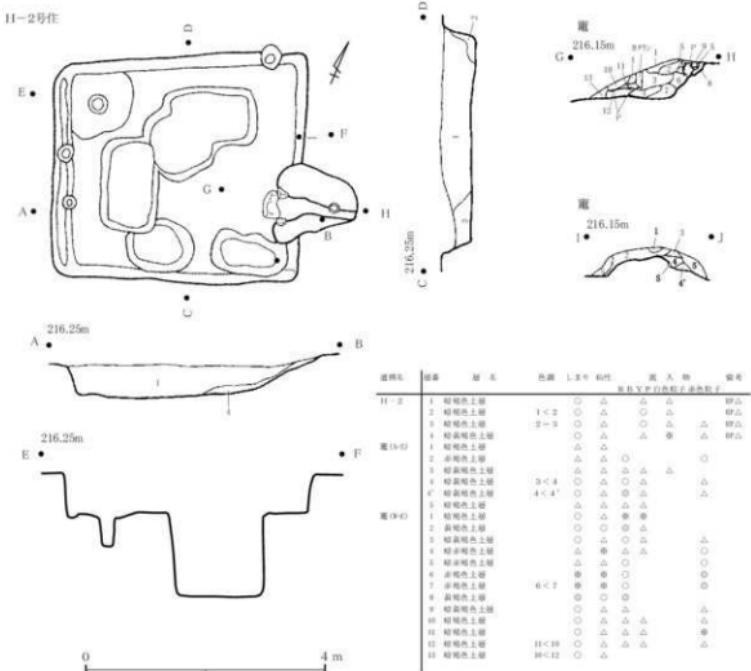
(単位: m)

住居名	平面形態	規模			櫛溝	主軸方向	土坑		電	時期	備考
		長軸	短軸	深さ			電脳	床下	主柱穴		
H-1	中形長方形	4.88	3.52	0.60	全周	N-15°-W	×	2	不明	北／東寄	II
H-2	中形長方形	4.16	3.56	0.56	西壁	N-70°-E	×	5	不明	東／南寄	II
H-3	小形正方形	3.40	3.28	0.64	×	N-81°-E	右	1	不明	東／南寄	I
H-4	中形長方形	4.84	3.84	0.76	×	N-7°-W	右	4	不明	北／東寄	I
H-5	中形長方形	4.96	3.60	0.44	×	N-95°-S	右	1	不明	東／南寄	II
H-6	小形正方形	3.84	3.84	0.64	北壁・南壁	N-75°-E	×	1	不明	東／南寄	II
H-7	小形正方形	3.92	3.64	0.76	西壁溝	N-74°-E	右	2	不明	東／南寄	II
H-8	×	×	×	0.64	×	×	×	×	不明	不明	II ほとんどの部分が調査区外
H-9	大形長方形	6.36	3.24	0.44	3／5	N-91°-S	×	3	(3)	東／南寄	II～III
H-10	大形長方形	6.32	4.00	0.56	1／2	N-100°-S	×	1	不明	東／中央	II～III

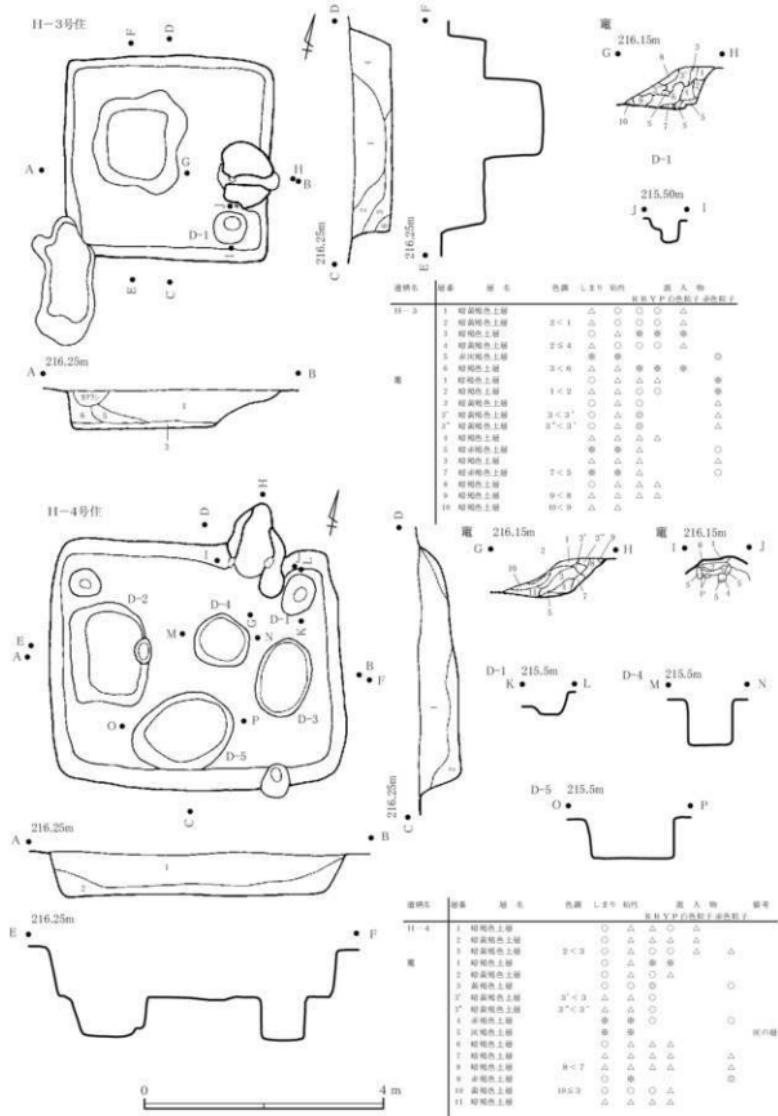
第2表 古墳～平安時代遺構観察表



第5図 H-1号住居址実測図

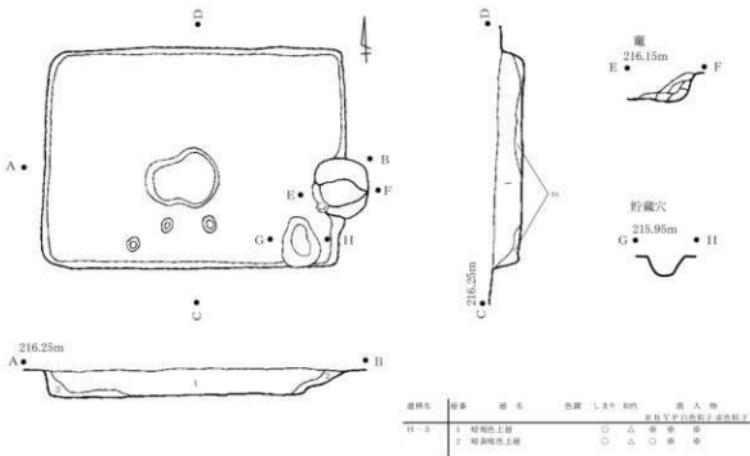


第6図 H-2号住居址実測図

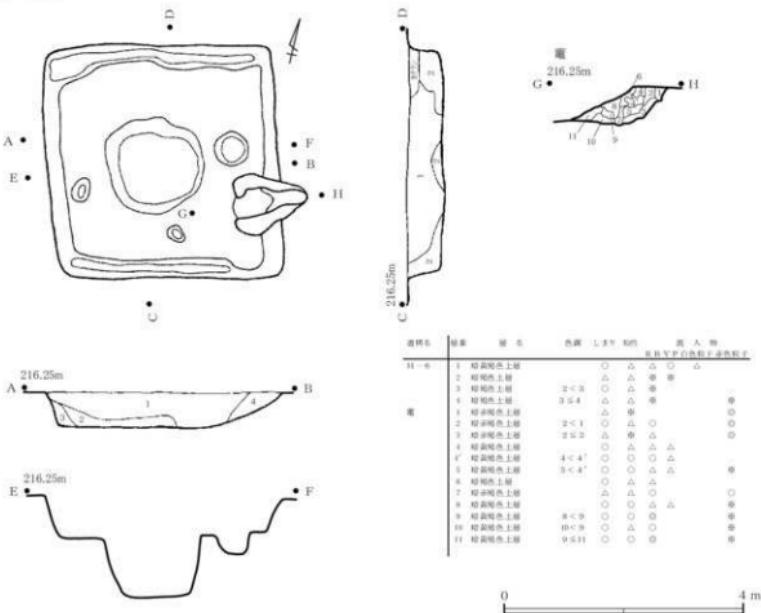


第7図 H-3号・H-4号住居址実測図

H-5号住

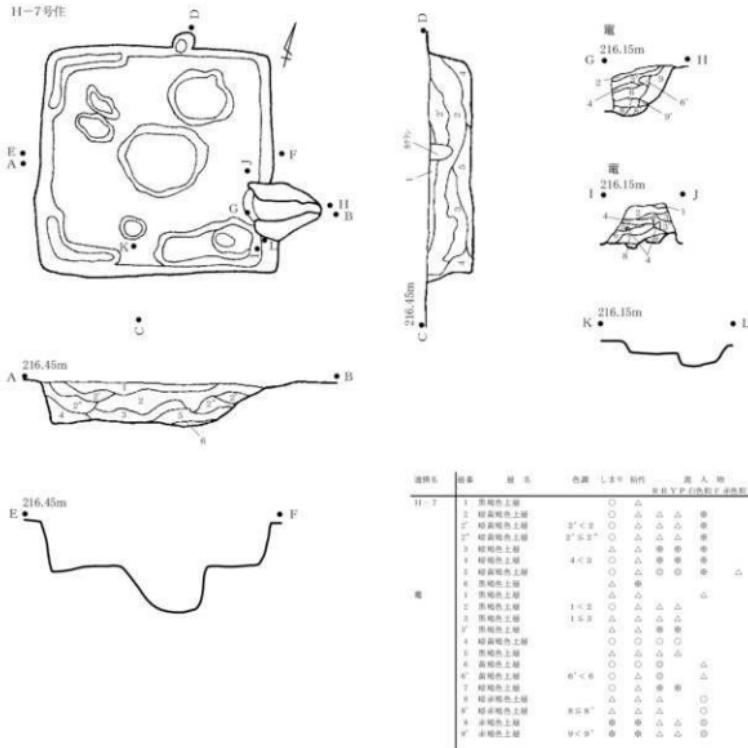


H-6号住

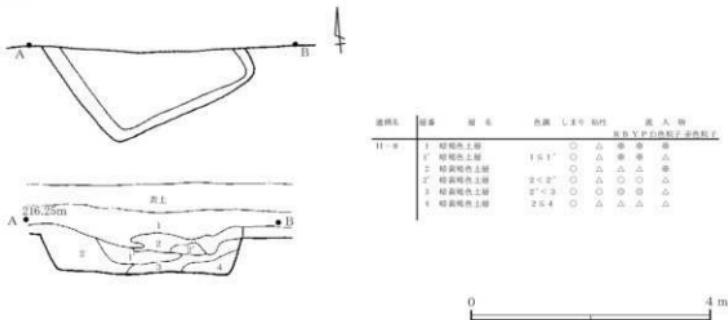


第8図 H-5号・H-6号住居址実測図

H-7号住

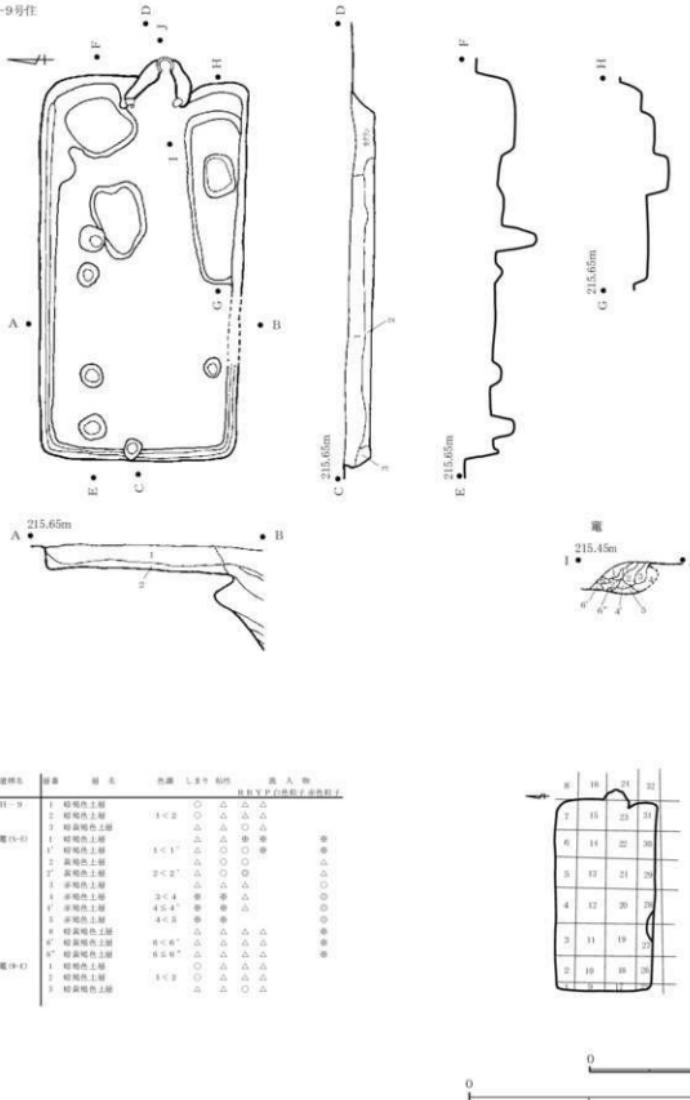


H-8号住



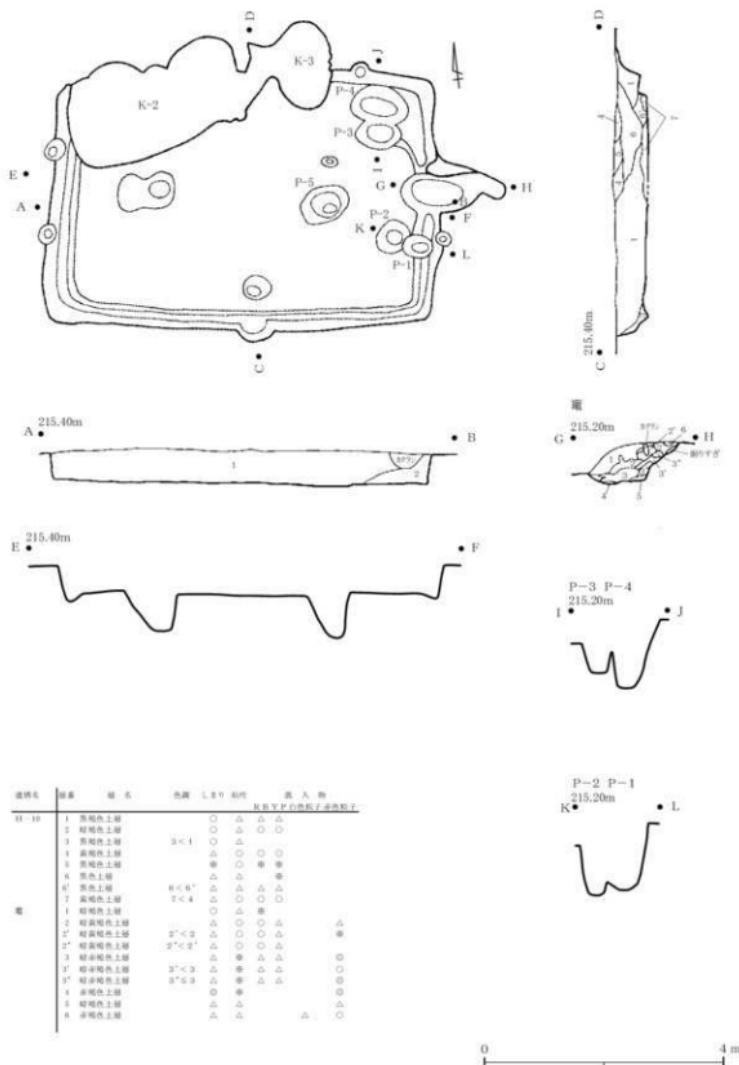
第9図 H-7号・H-8号住居址実測図

II-9号住

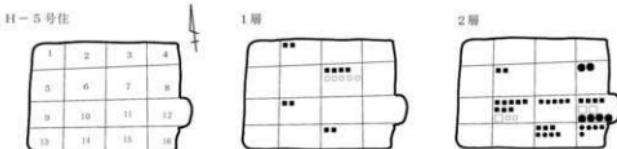
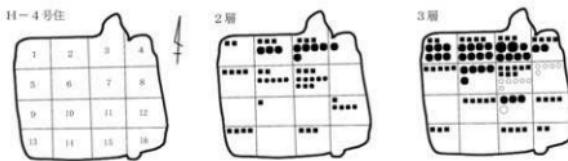
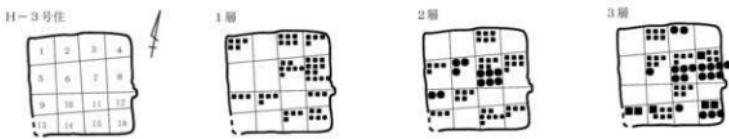
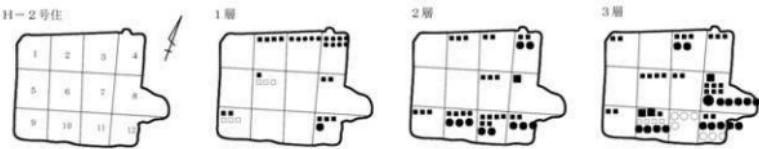
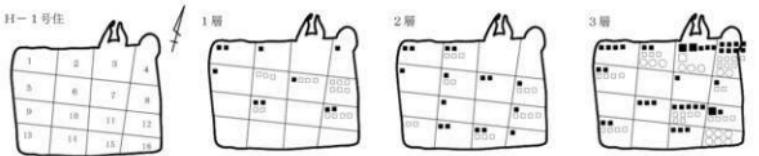


第10図 H-9号住居址実測図

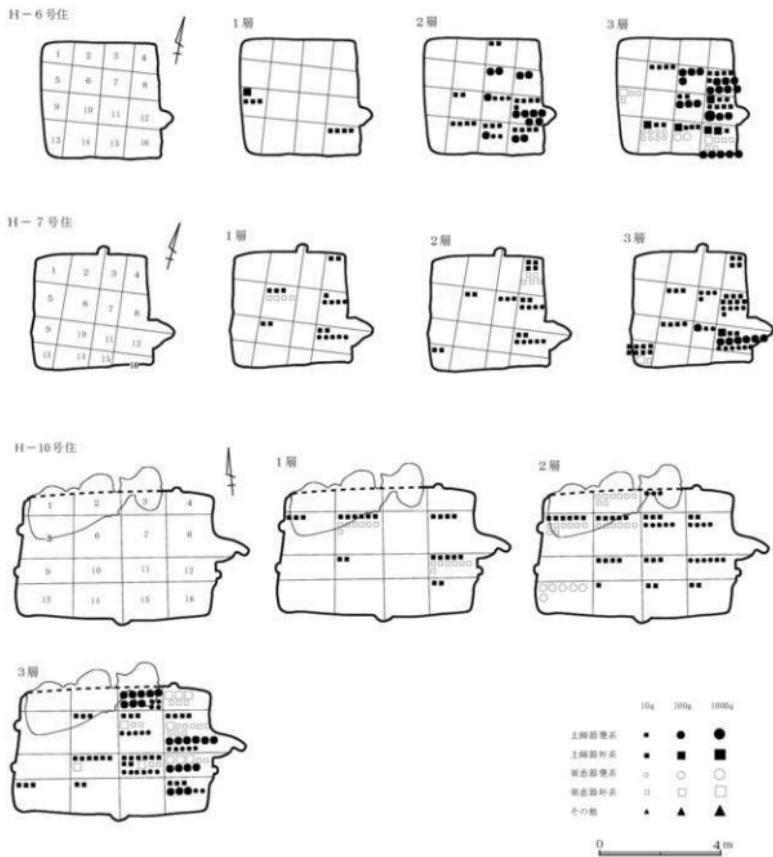
H-10号住



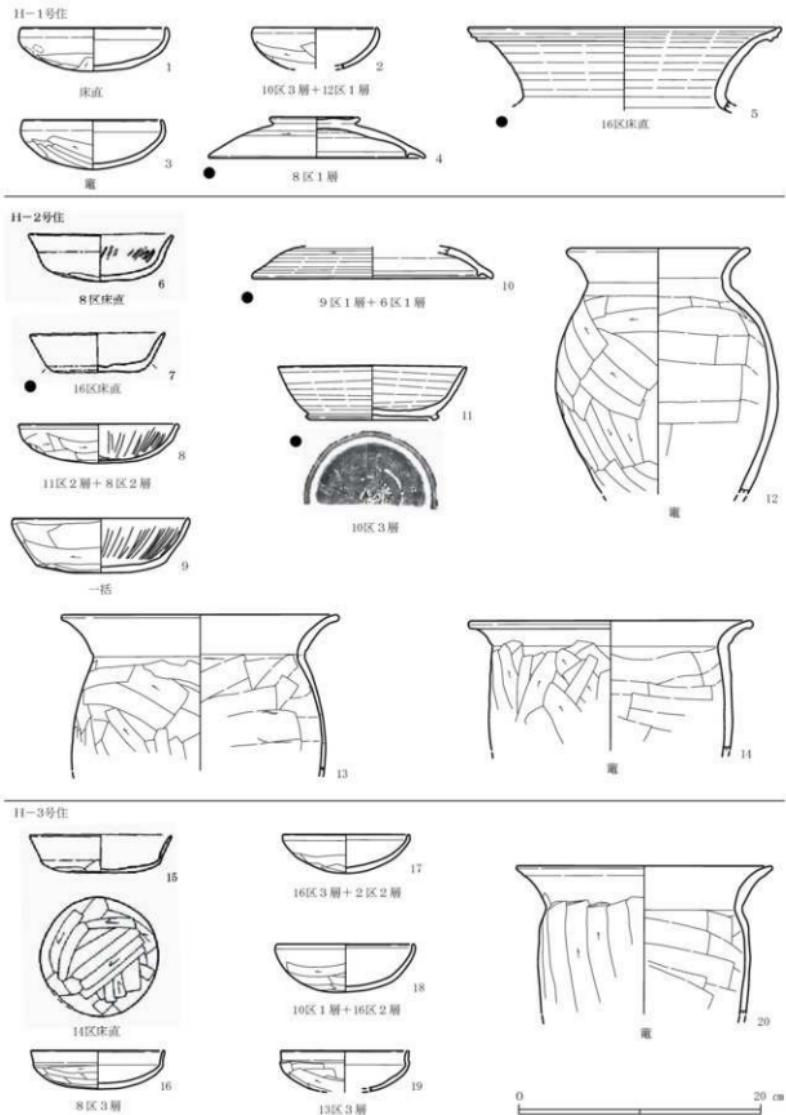
第11図 H-10号住居址実測図



第12図 住居址出土遺物分布図（1）



第13図 住居址出土遺物分布図（2）

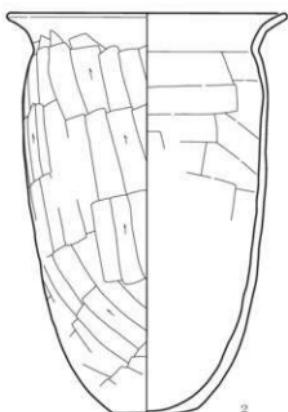


第14图 H-1号・H-2号・H-3号住居址出土土器実測図

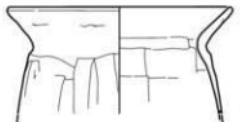
H-4号住



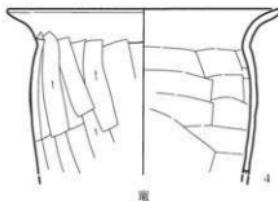
床直



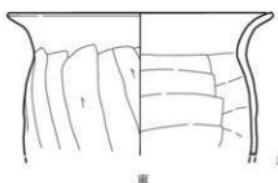
甕



6区3層+1区3層+2区3層



甕



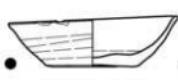
甕

H-5号住



甕

6



10区2層+7区1層



甕

10



7



10区床直



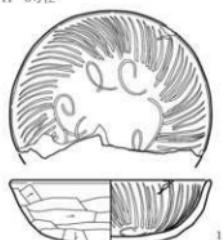
9

甕



第15図 H-4号・H-5号住居址出土土器実測図

H-6号住



16区1層+15区3層



重



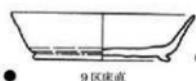
14区



9区1層



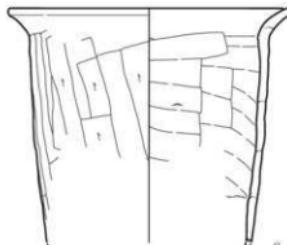
16区床底



9区床底



16区1層



9区+8区床底

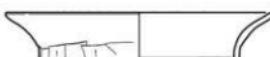
H-7号住



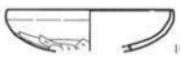
13区3層



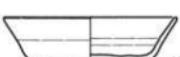
8区3層



12区床底



重



4区2層+6区1層



一括

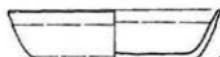


床底

H-8号住



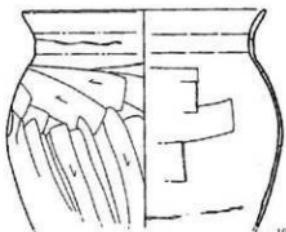
6区2層



6区2層



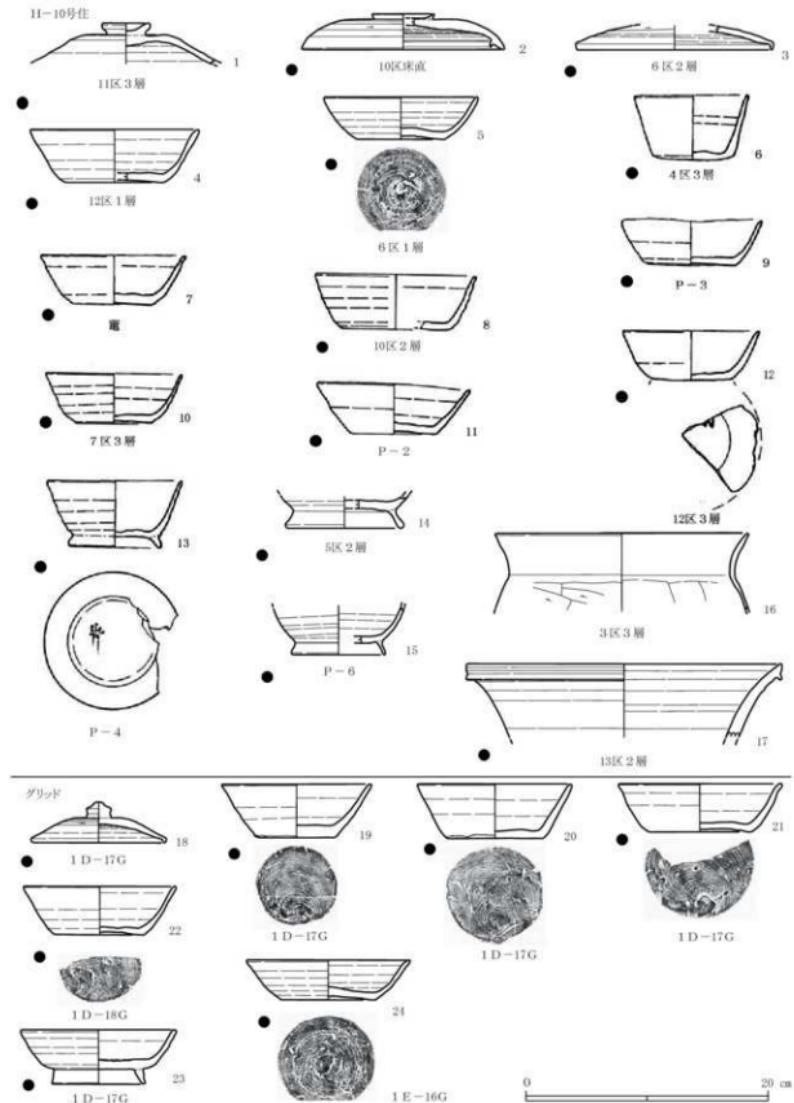
13区2層



重

0 20 cm

第16図 H-6号・H-7号・H-8号・H-9号住居址出土土器実測図



第17図 H-10号住居址・グリッド出土土器実測図

(3) 中世の遺構と遺物

1. 遺構

窯体（第18図・第19図）

窯址は3基検出された。

K-1号窯址

円形の燃焼室に長方形の焚口が付いた鍵穴状の平面形を呈し、燃焼室は外径1.3m、内径0.7cm、深さ45cmを計り底面から掘り鉢状に立ち上がる。燃焼室内には内耳土鍋、火鉢、掘り鉢が流れ込んだ様な状態で確認された。これらの遺物の上部には天井構築土の崩落と思われる黄褐色粘質土が覆っていたが、天井部分などの上部構造は確認できなかった。燃焼室と焚口の境には長さ70cm、幅30cmの礫が橋状にかけられ区切られている。燃焼室内にロストルなどの施設はなく、燃焼室と焼成室の仕切を確認することはできなかった。焚口は長軸1.7m、短軸1.2m、深さ40cmを計る。覆土内は燃焼室から掻き出したと思われる炭化材や、瓦質の土器片が多く含まれていた。

K-2号窯址

H-9号住居址と重複関係にある。平面形はK-1号窯址と同じく鍵穴状で、燃焼室は外径1.1m、内径80cm、深さ30cmを計り、遺物も同様に流れ込んだ様な状態で検出された。燃焼室内には三本の円筒形の土製品が立った状態で確認され、焼成室の製品を支える支脚のような役割と考えられる。焚口は長軸1.6m、短軸1.5m、深さ40cmを計り、覆土内には炭化材と瓦質陶器が多量に含まれていた。

K-3号窯址

H-9号住居址及びK-2号窯址と重複していて燃焼室のみの確認となった。燃焼室の平面形は梢円で、外径1.1m×90cm、内径1m×60cm、深さ60cmを計り、遺物はほとんど確認されなかった。燃焼室の壁面には板状の礫を使っている箇所があり、中央部には円錐形の棒状礫が置かれ、K-2号窯址同様、これらが支脚の役割を持っていたものと推測される。

掘立柱建物址（第20図）

掘立柱建物址は3基検出された。

HT-1号掘立柱建物址

2間×2間の規模を持ち、長軸4.54m、短軸4.15mを計る。柱穴の平面形は円形あるいは不正円形で平均して50cmの堀込みを持つ。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世と考えられる。

HT-2号掘立柱建物址

一部分調査区外となるが、2間×3間の規模を持つと考えられる。長軸7.85m、短軸5.15mを計る。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、堀込みは浅いもので30cm、深いもので70cmを計る遺物の出土は無いが覆土の状態から中世と考えられる。

HT-3号掘立柱建物址

2間×2間の規模を持ち、長軸4.3m、短軸4.1mを計る。柱穴の平面形は円形で、堀込みは浅いもので55cm、深いもので70cmを計る。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世と考えられる。

竪穴状遺構（第21図）

竪穴状遺構は3基検出された。

T-1号竪穴状遺構

平面形態は長軸方向にかまぼこ状を呈した隅丸長方形で、長軸4.3m、短軸2.85mを計る。北側の角と南西の1部に小ピットが掘り込まれている。堀込みは浅く平均して20cmを計る。遺物の出土はないが覆土の状態から中世に属すると考えられる。

T-2号竪穴状遺構

一部が調査区外となるが、隅丸長方形の平面形態を呈すると推測される。調査区内の規模は、長軸2.45m、短軸2.3m、堀込みは20cmを計る。覆土内には20cm台の礫が敷き詰められて様な状況で確認された。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世に属すると考えられる。

T-3号竪穴状遺構

一部が調査区外となる。調査区内の規模は、長軸3.25m、短軸1.3m、堀込みは20cmを計る。北東角に小ピット2基が確認され、T-2号同様に20cm台の礫が敷き詰められて様な状況で検出されている。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世に属すると考えられる。

井戸（第21図）

平面形態は円形で、長径5.1m×短径4.8mを計る。堀込みの深さは、危険が伴うため約5m掘り進んだところで止めた。堀込み断面はロート状を呈し、覆土はレンズ状の自然堆積が観察された。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世に属すると考えられる。

粘土採掘坑（第22図）

竪坑部と地下坑をもち地下式壙の形態を呈している。地下坑は3.5m×3.0mの楕円形で、深さ2.5m、底面はほぼ平らで壁はオーバーハンジしながら掘られている。竪坑部は地下坑の短軸方向にあり、底面が地下坑底面より約90cm上がる。覆土は竪坑側から人為的なおかづ短期間に埋め戻された状態を示しており、上層部分にはレンズ状堆積（直径2.5m、最も厚い部分で50cmを計る）をした土師質土器皿が1000点以上出土した。小皿の他にも内耳鍋、拂り鉢、羽口状土製品が出土している。

柱穴列（第23図）

柱穴列1

二対のピットで構成され、長さは10.8mを計る。二対のピット間隔は約1.6m、堀込みの深さは浅いもので40cm、深いもので1.2m、平均で約80cmを計る。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世に属すると考えられる。

柱穴列2

柱穴列1同様二対のピットで構成される。柱穴列1よりも対になるピットの間隔は広く、平均2.5mを計る。柱穴列の長さは11.2mを計る。ピットの堀込みは東側の列は浅いものが多く、深いもので15cm、深いもので60cmを計る。西側の列は浅いもので70cm、深いもので90cmを計る。長さは10.8mを計る。二対のピット間隔は約1.6m、堀込みの深さは浅いもので40cm、深いもので1.2m、平均で約80cmを計る。遺物の出土は無いが覆土の状態から中世に属すると考えられる。遺物の出土は無いが覆土の状態から中

世に属すると考えられる。

土坑（第24図）

土坑は10基検出された。

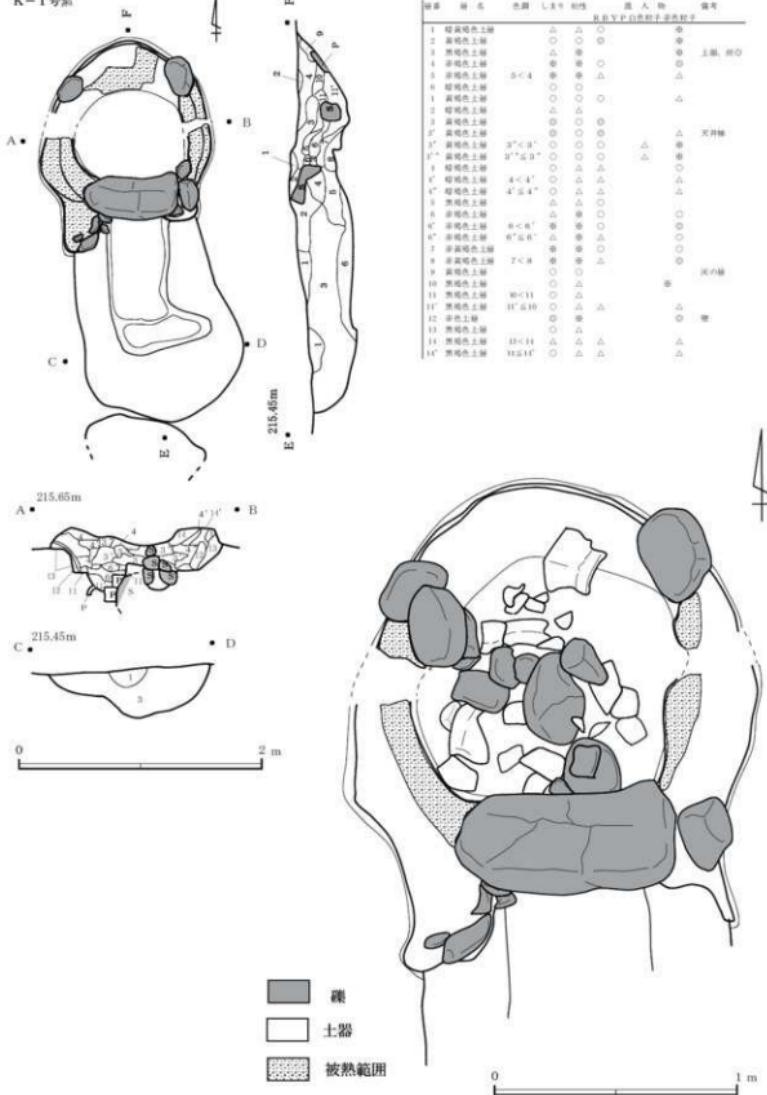
- D-1号土坑 平面椭円形、規模1.9m×75cm、深さ55cm。
- D-2号土坑 平面椭円形、規模1.9m×1.45m、深さ15cm。
- D-3号土坑 平面不整円形、規模1.25m×1.25m、深さ60cm。
- D-4号土坑 平面椭円形、規模1.2m×60cm、深さ70cm。
- D-5号土坑 平面不整円形、規模1.5m×1.25m、深さ75cm。
- D-6号土坑 平面不整円形、規模1.2m×1.1m、深さ70cm。
- D-7号土坑 平面不整円形、規模1.4m×1.2m、深さ55cm。
- D-8号土坑 平面椭円形、規模1.15m×90cm、深さ45cm。
- D-9号土坑 平面不整円形、規模3.3m×2.15m、深さ55cm。
- D-11号土坑 平面不正円形、規模2.5m×1.35m、深さ25cm。

ピット群（第25図）

H T-1号掘立柱建物址、柱穴列1の周辺にピット群が検出された。遺物の出土は無いが、覆土の観察から中世のものと思われ、これらの遺構及び窯址と同時期に存在していた事が推測される。

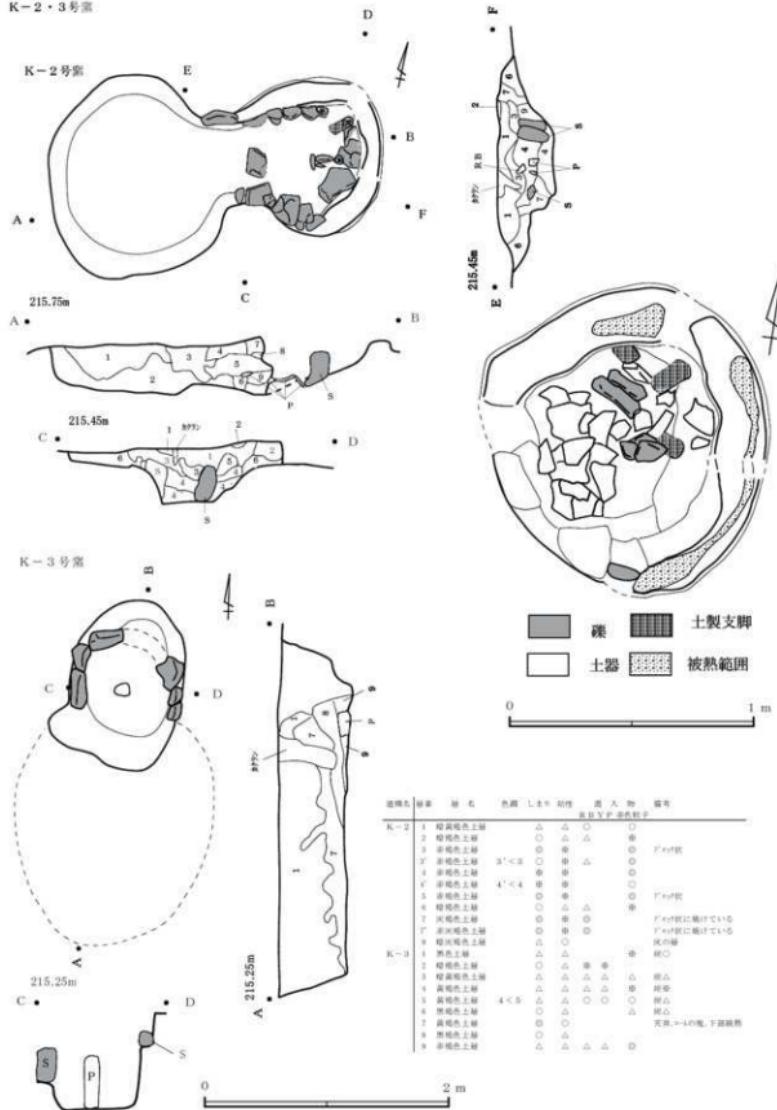
(千田茂雄)

K-1号窯

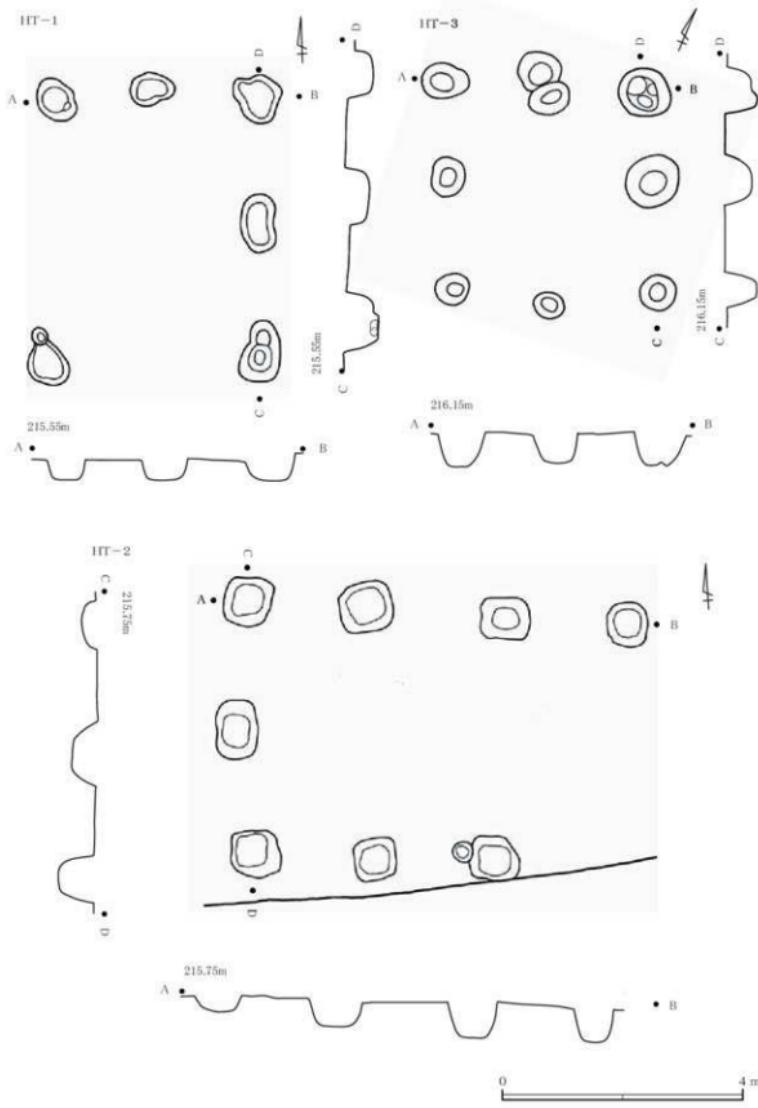


第18図 K-1号窯址実測図

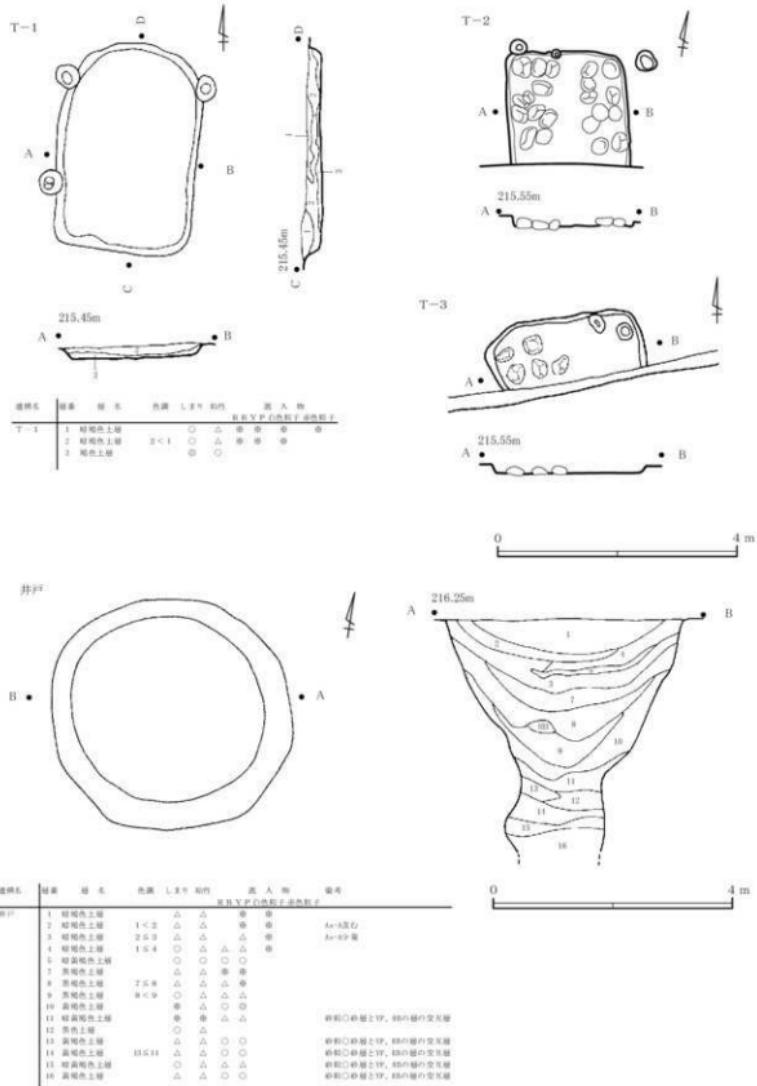
K-2・3号窓



第19図 K-2号・K-3号窓実測図

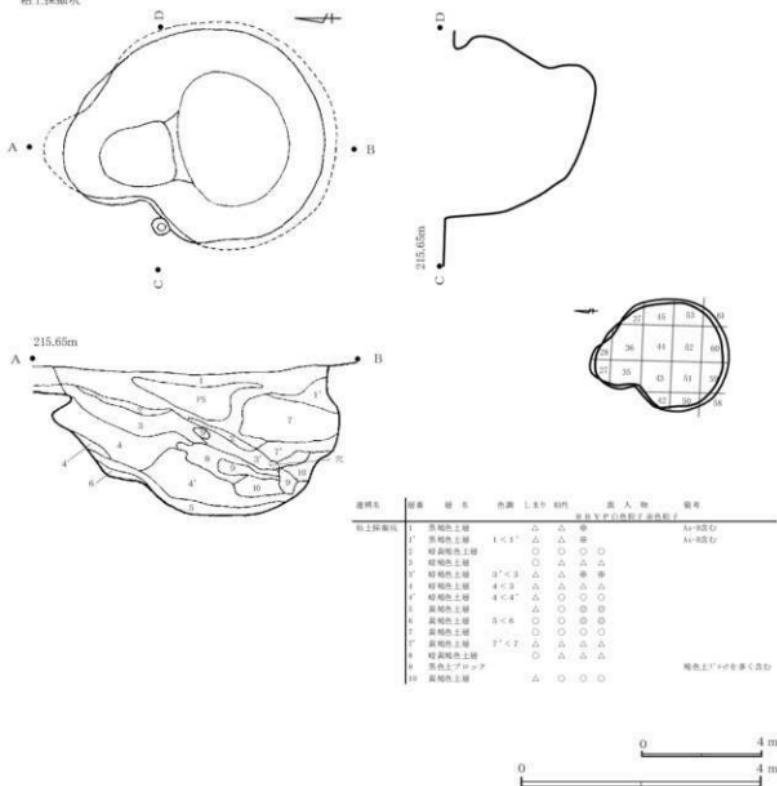


第20図 捜立柱建物址実測図



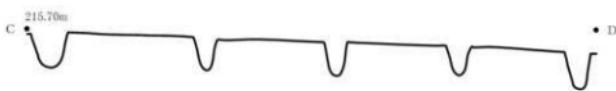
第21図 積穴状遺構・井戸実測図

粘土探掘坑

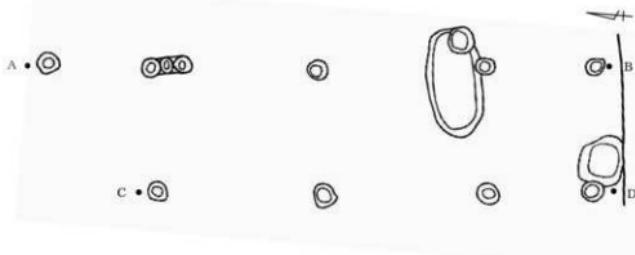


第22図 粘土探掘坑実測図

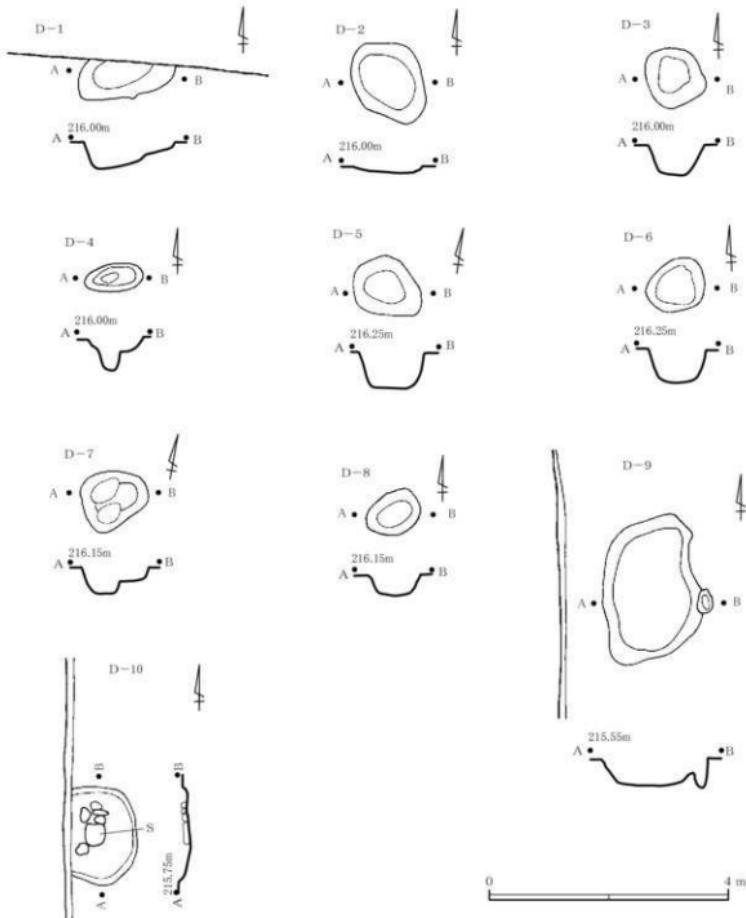
柱穴列1



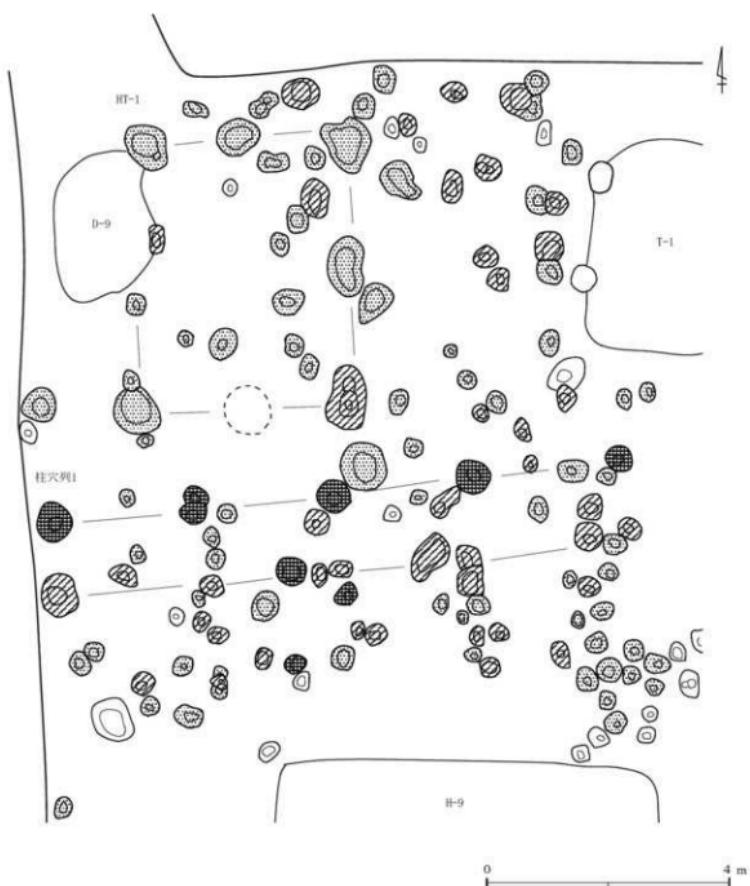
柱穴列2



第23図 柱穴列実測図



第24図 土坑実測図



第25図 A区ピット群実測図

2. 遺物

出土品の器種は、内耳土鍋・皿状土器（蓋？）・擂鉢（調理具）、火鉢（暖房具）、土師質皿（カワラケ）が認められる。

土師質土器皿（第26図）

1～7は、粘土探掘坑からの出土で、その数は1000点を超える。多くは完形品に近いが、亀裂や若干の欠損もみられる。未使用な状態のものが多いなかで、皿の口縁部に煤の付着した個体もあり、灯明具として使用されたものが含まれる。輪轆成形で、底部は左回転糸切りの個体が主体である。器形は平底から外傾し、15世紀後半の時期が設定できる。大まかに6～8cm程度の小、12cm程度の中、16cm程度の大の規格がある。このほか、「耳皿」が数点確認された。

鍋（第26図・第27図）

K-1号窯址（8～12）、K-2号窯址（1～4）、粘土探掘坑（6）で出土した。全体的には破片が多く、接合率は低い傾向にある。また体部や口縁部が歪んだ（焼き損じ）個体が認められる。復元可能な個体を図示したが、口径約30cmを中心に、大・中・小の規格が考えられる。土器の成形は、円形の粘土板の上に、粘土紐を積み上げる輪積み成形を基本とする。口縁部内側には一対二耳の「C」字状の内耳、添付手法は「タイプ2」（清水2000）をつける。焼成は土師質と瓦質があり、外側に焼し処理をしたものも認められる。器形は、平底からほぼ直線的に立ち上がる胴部をへて、口縁部は「く」の字状に外反する「上野・武藏」型である。時期は木津編年（木津博明1989）の15世紀後半に設定される。

また、鍋の体部内側に割り目のつくものが数点認められた。煮炊きのほかに割り鉢としての機能を持つ「多機能鍋」とも言える製品で、特注品ないしは試作品の可能性が考えられる。さらに、成形や調整技法は鍋と同様であるが、直線的に体部が立ち上がる口径約20cm・高さ10cmの小型品も認められる。

皿状土器（第27図）

5は蓋の可能性も考えられる。口径約40cm程度で、底部の成形や調整技法は鍋と同様である。体部は高さ約6cmで短く外傾し立ち上がる。色調は暗灰色で瓦質に焼成される。歪みや亀裂（焼き損じ）のある個体が認められる。使用痕はないが、皿状土器と鍋の口径数値が近く（鍋の口縁部内側に、皿状土器が正位が収まる。或いは、鍋より皿状土器の口径が大きい場合、逆位で蓋ともなる。）、鍋の蓋と「いる」機能を合わせ持った調理具の可能性を考えたい。

擂鉢

出土量は少ない。粘土紐積み上げ整形で、底面に糸切り痕が残る。卸目が付き、体部がやや外反気味に立ちあがることから、15世紀後半頃の時期が設定される。

火鉢

出土量は、極めて少ない。印花文で加飾される。

羽口（第27図）

粘土探掘坑（7・8）から出土した。出土量は少ない。口径約7cm程度で、長さ約24cmを計る。表面には削りによると思われる調整痕、成型時のものと考えられる指頭痕が残る。K-2号窯の燃焼室内に於いて確認された三本の円筒形の土製品と規格がほぼ同一であり、両者の関係が注目される。

まとめ

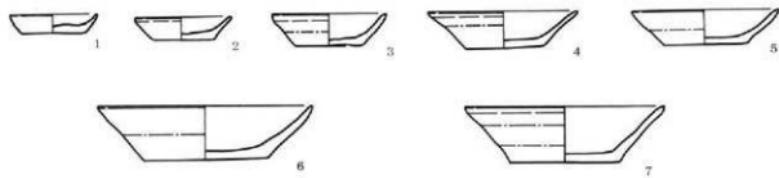
内耳土鍋や鉢など、中世の土器を焼成した窯体の調査は本遺跡が東日本に於いて最初の事例である。当該地は平屋の住宅が建っており、畑のように耕作により深くまで擾乱を受けていなかったことが幸いしたようである。また、前記のごとく遺物の出土は無いものの竪穴状遺構、掘立柱建物址、柱穴列などはその覆土の観察から中世のものと思われ、窯跡と同時期に存在していたことが推測される。これらの遺構は土器製作の作業に関連する施設である可能性が高く、本遺跡が中世土器製作に関わる工房としての性格を持つ遺跡であることが推測される。

出土遺物についてその各器種を観察すると、酸化焰焼成の内耳土鍋と土師質土器皿のなかに、色調・胎土（粘土に混入した砂の割合を含む。）が非常に似ている個体が認められた。さらに、土器を消費する遺跡では通常認められない、歪み・亀裂などの個体が存在することから、鍋・皿状土器及び土師質土器皿は、本遺跡で生産されたと言うことができる。

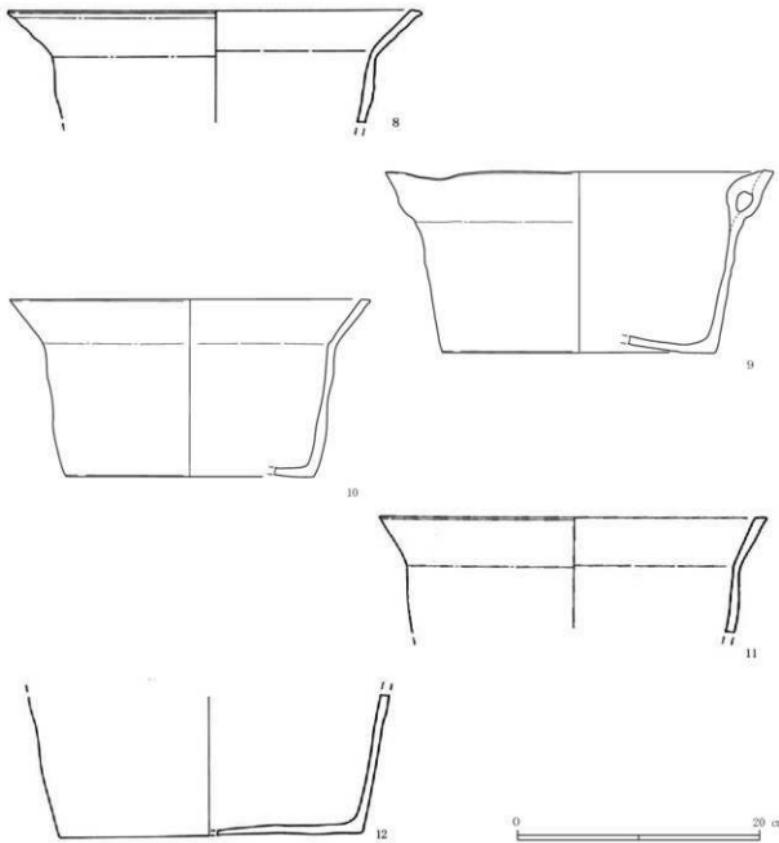
また、土器生産にあたっての採土は、本遺跡内の粘土採掘坑以外に本遺跡の北約1.5kmの九十九川沿岸の低地に、平安時代にさかのぼる水田地帯と、九十九川支谷が榎下神社北辺にあり、谷底平野を利用した水田耕作も考えられるため、このあたりの水田耕土を用いた可能性も指摘しておきたい。

（千田茂雄）

黏土採掘坑

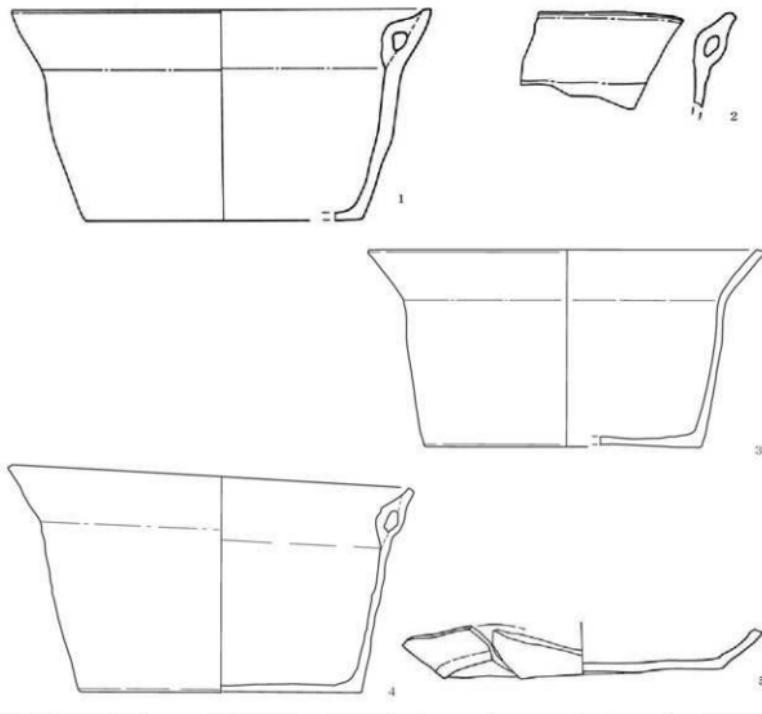


K-1号窯址

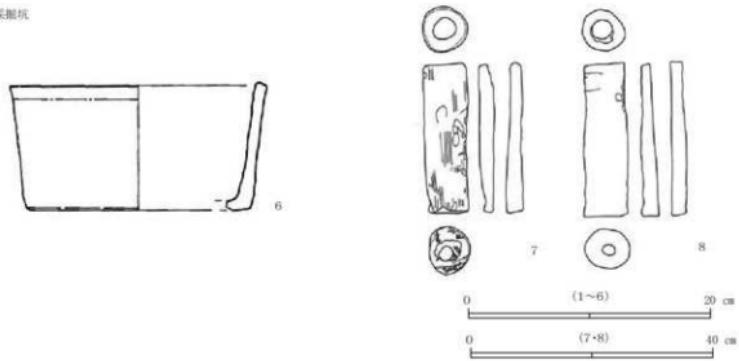


第26図 中世土器実測図（1）

K-2号墓址



粘土探掘坑



第27図 中世土器実測図（2）

2 清水V遺跡

(1) 概要

清水V遺跡では、建物部分と道路部分を発掘調査した結果、縄文時代前期、律令期、奈良時代、平安時代の集落跡と、中世の土器生産に係わる窯址を主体とする遺構群が発見された。A区では、北側に隣接するI区とIV区で確認された縄文時代前期と律令期の集落跡の一部を確認し、集落跡の南側範囲がA区周辺を境とすることが明らかとなった。また、C区とE区あたりでは縄文時代の遺構、遺物の密度は低く、律令期から平安時代の住居址が点在する小規模集落跡が存在することが明らかとなった。C区ではII区で検出された中世の窯址と類似する遺構が1基検出され、工房址群の北側範囲を確認した。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

1. 遺構

J-1号住居址（第29図）

A区、IV層上面で確認した。当初、住居址上面は同時期の遺物包含層に覆われていたため、確認できず、遺物を取り上げた後の確認となった。また、プラン及び掘り込みがはっきりとしなかったため、遺物の集中貝合で住居址として認定した。長軸3.6m、短軸2.6mの平面長方形で、深さ60cmを測る。主柱穴は不明で、小穴が不規則に並ぶ。炉跡は確認されなかった。覆土は自然堆積による埋没である。遺物は、覆土下層で関山Ⅱ式期の土器破片、覆土上層で有尾・黒浜式期の土器破片が検出された。石器では石礫、石錐、石匙、スクレイバー、凹石、磨石等が出土した。

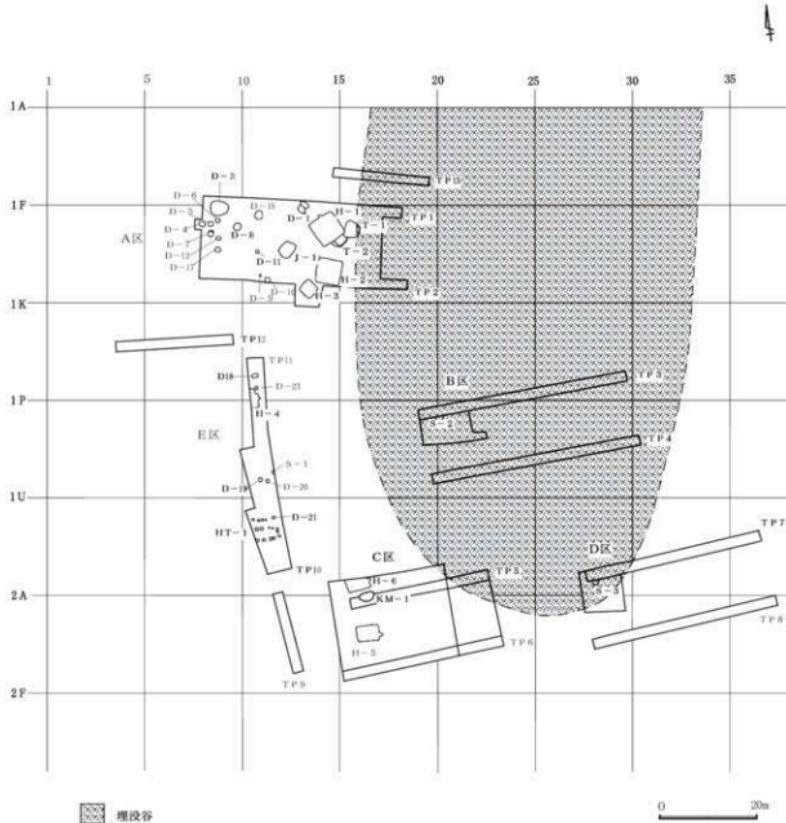
土坑（第30図）

土坑はA区で10基検出された。調査区西側に分布域が認められた。平面円形で断面が袋状と鍋底状のものが主体である。遺物は覆土中に土器破片、石器が混入していたが、底面に大形土器破片が検出される例もあった。D-4号土坑の底部からは、胴下半部が抜けた大形深鉢が遺棄されており、その周辺で同一個体の大形土器破片が出土した。覆土はロームが多量に混入した埋め戻しを呈していた。また、D-8号土坑では凹石3点（内欠損1点）、結晶片岩製の石製品2点が出土した。これらの土坑は単に貯蔵目的としたものではなく、副葬品を作り土坑墓の可能性が高い。土坑の時期は出土遺物と土坑周辺の遺構及び遺物の様子から、前期前半（関山Ⅱ式期～有尾・黒浜式期）所産と考えられる。

遺物集中地点

J-1号住居址上面及びその周辺において、III層下部からIV層上部の間で前期前半の遺物が層位的にまとまって分布する範囲を確認した。J-1号住居址内には関山Ⅱ式期の土器群が混在していたが、その上面を覆う遺物集中地点の遺物は、有尾・黒浜式期の土器群及び石器群に限定されていた。この遺物集中地点は住居廃棄後に形成された、「廃棄場所」と考えられる。

（井上慎也）

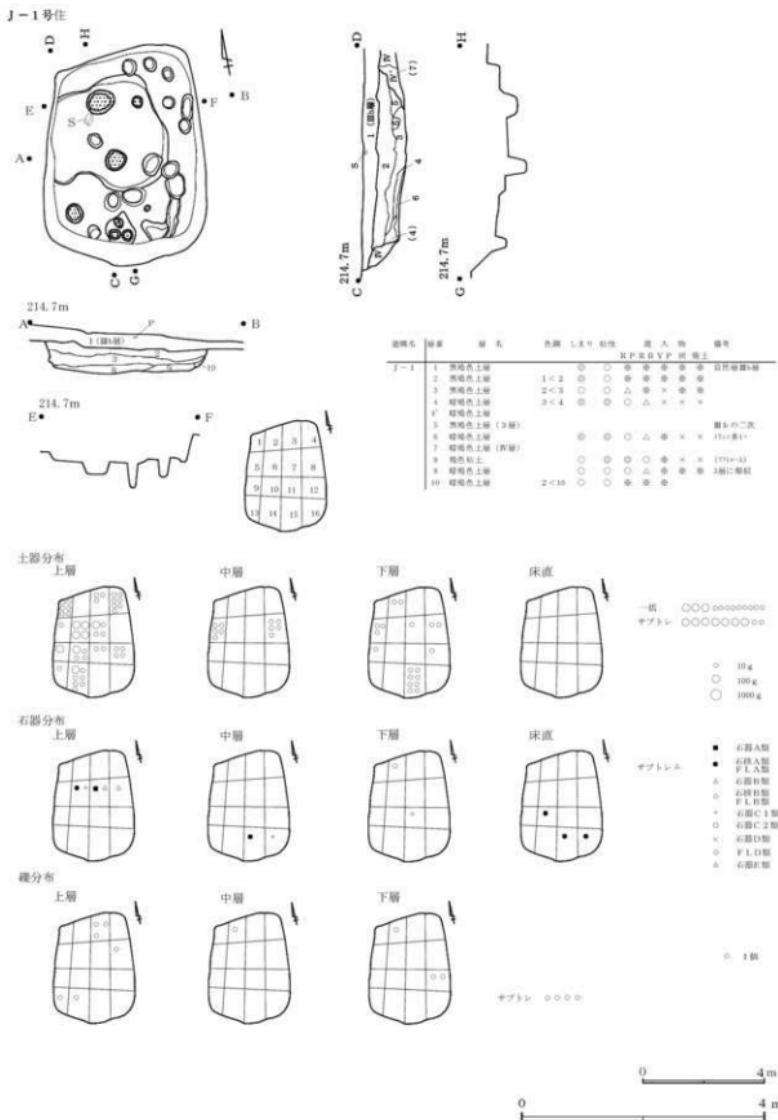


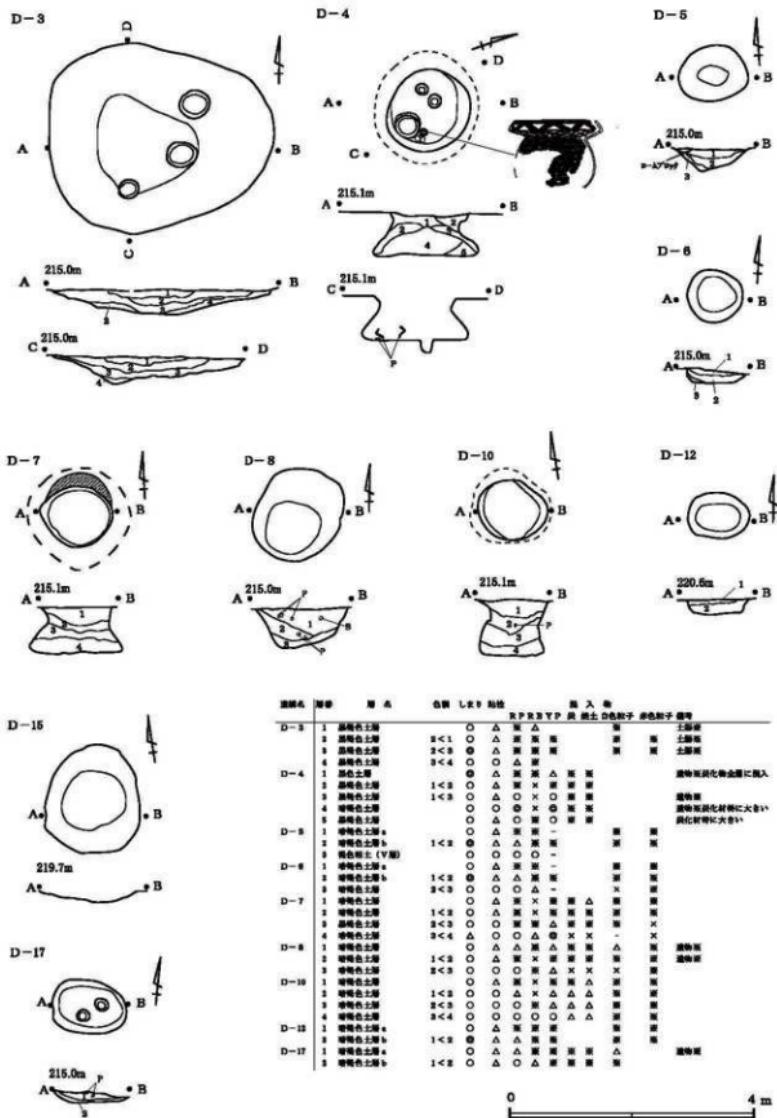
第28図 清水V遺跡 遺構配置図

(単位: cm)

遺構名	規模(上)		規模(下)		深さ	平面形態	断面	遺物	時期	所見
	長軸	短軸	長軸	短軸						
D-3	366	206	165	146	43	梢円形	皿状	土器片	前期	椭穴状遺構。
D-4	124	108	100	90	70	円形	袋状	深鉢1個体、石器	前期	覆土に炭化物混入。深鉢を底面に安置。
D-5	114	91	48	31	40	円形	皿状		前期	
D-6	90	86	65	57	20	円形	皿状		前期	
D-7	106	98	168	143	72	円形	袋状		前期	覆土に炭化物混入。
D-8	157	133	88	86	64	円形	皿状	土器片	前期	覆土に炭化物、遺物混入。
D-10	114	98	89	95	90	円形	袋状	深鉢1個体、土器片	前期	覆土に炭化物、遺物混入。底面で潰れた深鉢出土。
D-12	100	74	73	44	20	梢円形	皿状		前期	
D-15	177	154	106	94	20	円形	皿状		前期	
D-17	119	87	102	65	18	梢円形	皿状	土器片	前期	覆土に炭化物混入。覆土上層で土器片出土。

第3表 繩文時代遺構観察表





第30図 土坑実測図

2. 遺物

縄文土器

本遺跡からはA区において、遺構及び遺物包含層から前期前半を主体とする土器群が検出された。また、各調査区あるいは調査区外からも同時期の土器群の他、中期（加曾利E式）、後期の土器も少数出土した。

J-1号住居址出土土器（第31図1～12）

出土土器は、関山II式及び有尾・黒浜式である。1は口縁部で、2は頸部の破片である。いずれも半裁竹管状工具による平行沈線文を施文後に、連続爪形文を施文したものである。3は、地文に縄文、竹管状工具による平行沈線を施文後に、沈線間に櫛歯状工具により列点状刺突を施し、コンパス文を施している。4は頸部の破片で、縄文施文後に、コンパス文を施している。5は、隆帯を貼付後押引き後に、半裁竹管状工具による平行沈線文の中に列点状刺突を施している。6・7は、平行沈線文の中に列点状刺突文を施したもの。8は、櫛歯状工具による列点状刺突文を、9は半裁竹管状工具による押引き施文したものである。10は、口縁部の破片で、半裁竹管状工具による平行沈線文が施されている。11・12は頸部の破片で、羽状縄文が施されている。

土坑出土土器（第31図・第32図13～22）

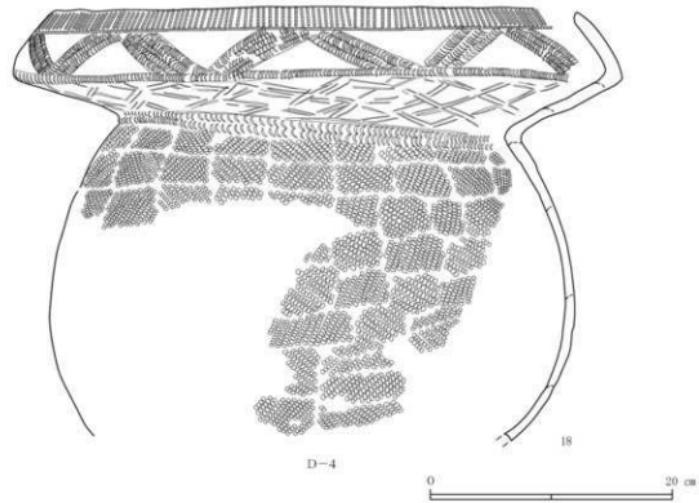
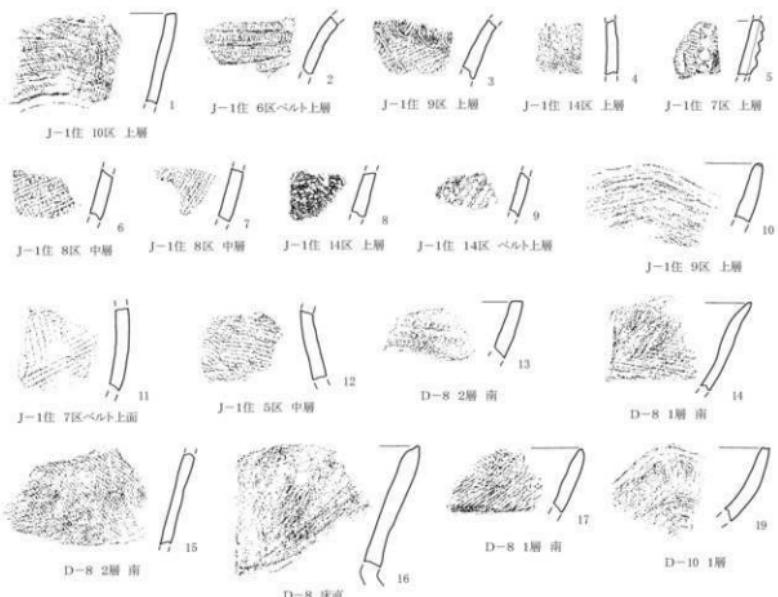
土坑出土の土器は有尾・黒浜式である。13は、口縁部の破片で半裁竹管状工具による連続爪形文を施している。14・15は、口縁部で羽状縄文を施している。16・17は、口縁部で縄文を施している。18は、推定口径が40cm、残存高36cmをはかり、底部が欠損している。平口縁を呈し、大型キャリバー形を呈する深鉢である。口縁部で大きく屈曲している。口縁部には櫛歯状工具による連続刺突文が施されている。頸部には、半裁竹管による平行沈線文を施文後に、連続爪形文により三角形や菱形状の文様が施されて、胴部には羽状縄文が施されている。19は、口縁部の破片で、地文に縄文施文後に、口端部に一条の沈線を引き、平行沈線文や櫛歯状工具による列点状文を施している。20は、推定口径が22cm、残存高15cmをはかり、底部が欠損している。平口縁で櫛歯状工具による条線を施している。21は、口縁部で羽状縄文を施している。22は、胴部で羽状縄文を施している。

グリッド出土土器（第32図23～31）

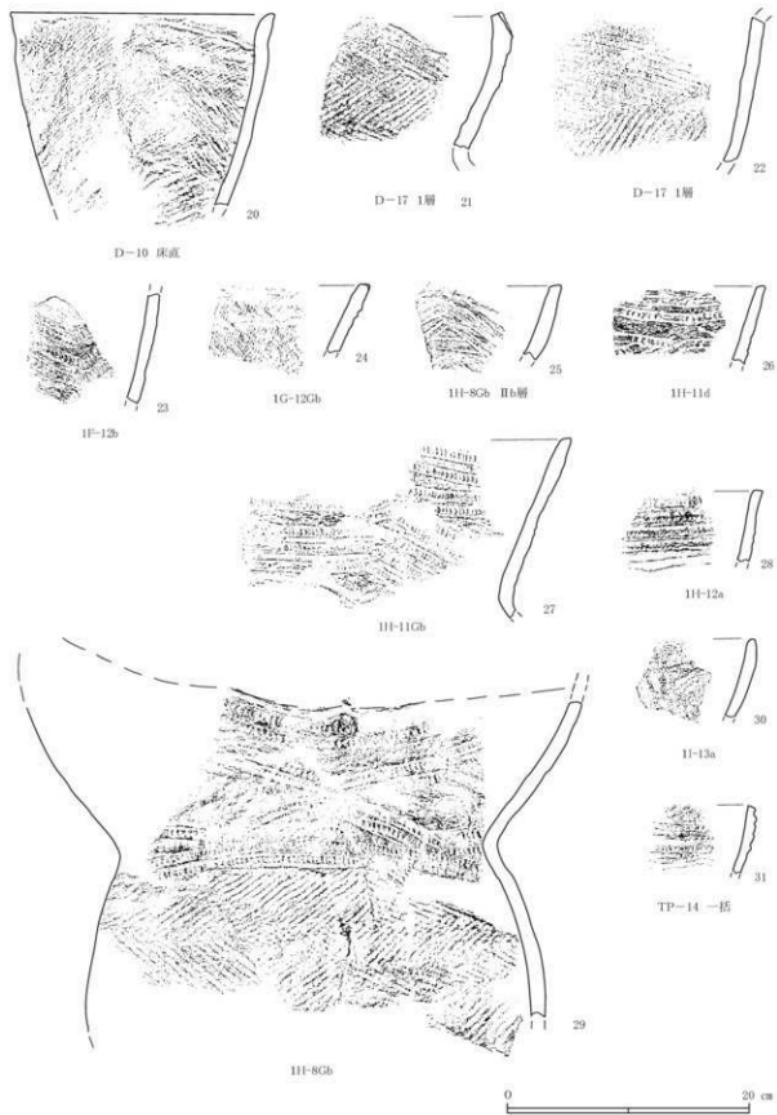
有尾・黒浜式を主体とする。

23は、半裁竹管による平行沈線文を施文後に、連続爪形文を施文している。24は、口縁部で口端部と口縁部に一条づつ沈線を施文後に、羽状縄文を施している。25は、櫛歯状工具による条線を施している。26は、口縁部で半裁竹管状工具による連続爪形文を施している。27は、口縁部で半裁竹管状工具による連続爪形文を施し三角形や菱形状の文様を施している。28は、口縁部で半裁竹管状工具による平行沈線文を施文後に、連続爪形文を施している。29は、口縁部から胴部の破片である。平口縁を呈し、大型キャリバー形を呈する深鉢である。口縁部で大きく屈曲している。口縁部には櫛歯状工具による連続刺突文が施され、頸部には半裁竹管状工具による連続爪形文により三角形や菱形状の文様が施されて、胴部には羽状縄文が施されている。30は、口縁部で羽状縄文を施している。31は、半裁竹管状工具による連続爪形文施している。

（松澤浩一）



第31図 繩文土器実測図（1）



第32図 繩文土器実測図（2）

石器

A区を中心に遺構及び遺物包含層から多数の石器が出土した。これらの石器群は土器型式との共伴関係により、関山II式期から有尾・黒浜式期に帰属するものと考えられる。また、各調査区の表土中及び規乱層においても単独出土がみられたが、帰属時期は不明である。

器種・系列組成（第33図）

全体的にB類石器とC類石器を主体とし、A類石器は少ない傾向が認められた。しかし、石器製作についてはA類、B類共に活発である。一方、D類、E類石器については少ない。石器製作・消費が活発なパターンである。遺構に伴うものは少ないと、A区の石器は土器群との共伴関係から判断して前期前葉から中葉にかけての石器群と推測される。また、A区以外の調査区から出土した石器についても、同時期帰属する可能性が高いと思われる。

石材組成（第33図）

石器石材は、在地の頁岩と安山岩を主体的に選択し、消費している。この2つの石材以外では、非在地の黒曜石、在地のチャート・硬質頁岩・黒色安山岩（以上A類石器の石材）、在地の牛伏砂岩（C類石器の石材）、在地の緑色岩類（E類石器の石材）が選ばれているが、その消費量は極端に少ない。剥片石器には頁岩、礫石器には安山岩といった石材組成は、当地域の石材利用傾向と一致する。

石器各説（第34図・第35図）

A類石器 石鏃（1～3）は3点出土し、全て黒曜石製のII形態（凹基無茎）である。石錐（4・5）は2点出土した。二辺を鋭角に調整し、先端部を作出する。4はIIa形態、5はIa形態である。5には磨滅による使用痕が観察される。石匙A類（6～8）は、Ia形態（6・7）、IIb形態（8）である。石材はチャート・珪質頁岩・黒色安山岩である。

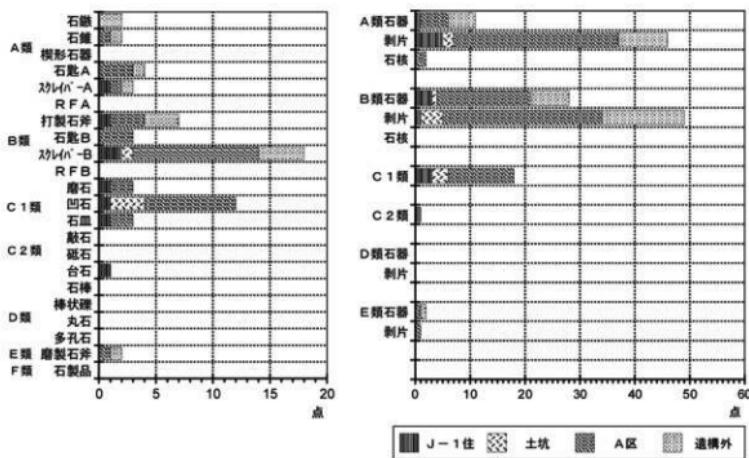
B類石器 石匙B類（9～11）は、Ia形態（9・10）、IIa形態（11）である。A類と同様、精緻な調整が施されている。全て黒色頁岩である。打製石斧（12～14）はI形態（12）、II形態（13・14）である。II形態は断面が厚く、縦面が残る。スクレイパーB類（15～20）は、Ib形態（15・16）、II形態（17）、III形態（18～20）が主体である。素材剥片は打点が斜めとなる角打ち技法によるもので直接打撃による片刃となるものが多い。石材は頁岩である。

C類石器 磨石（21）は両面に磨痕がある。凹石（22～25）はIIb形態で、端部に敲打痕のあるものも認められる。石皿（26・27）は安山岩製で両面に平坦な作業面がある。

F類石器 石製品はD-8号土坑から2点（28・29）出土した。2点とも結晶片岩製で、28は円形扁平礫の側面が研磨され、29は棒状に仕上げられ、欠損している。

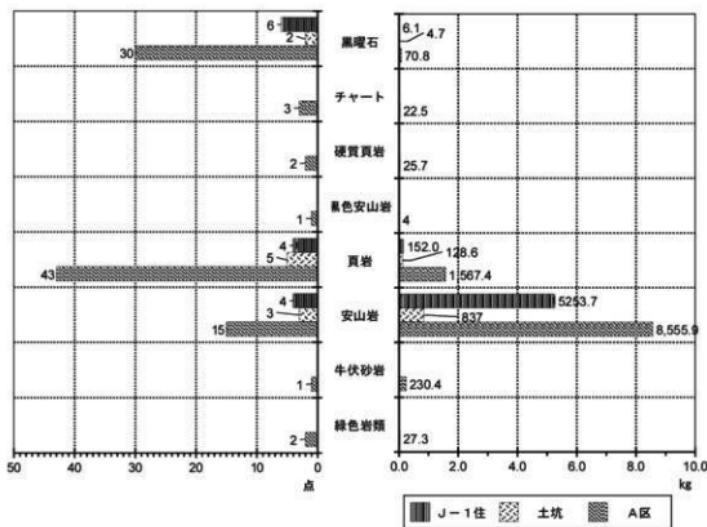
（井上慎也）

石器器種組成

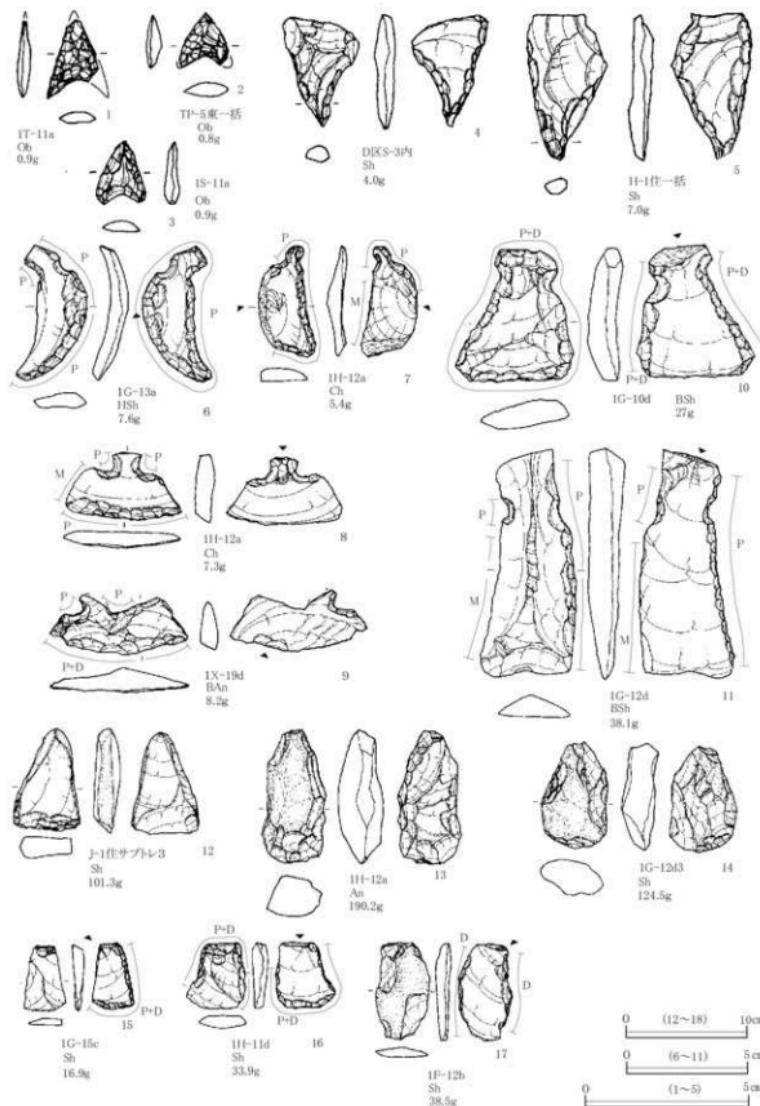


石材点数

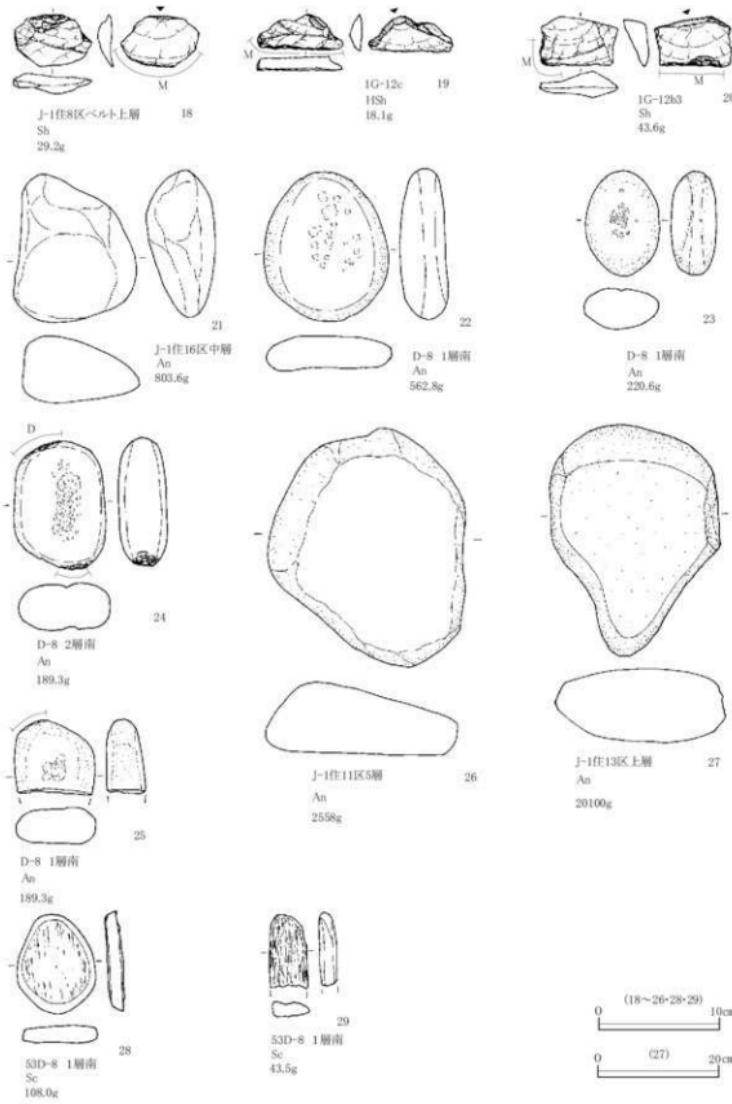
石材重量



第33図 繩文石器組成



第34図 繩文石器実測図（1）



第35図 繩文石器実測図（2）

(3) 古墳～平安時代の遺構と遺物

1. 遺構

住居址（第36図～第42図）

古墳時代終末期（律令期）：H-1、2号住居址

奈良時代：H-4、6号住居址

平安時代：H-5号住居址

時期不明：H-3号住居址（律令期の可能性）

古墳時代終末期の住居址

A区で2軒検出された。住居址は平面正方形で中規模である。主柱穴は4本で壁面にも小ピットが検出された。竈は住居址北壁中央部に設置され、竈の構造は壁を浅く掘り込み、黒色土とロームで袖を作り、焚き口部分の袖芯には土師器甕が埋め込まれ、天井も甕を転用するタイプである。竈正面の右脇には円形の貯蔵穴（土坑）が存在する。H-2号住居址では東にも竈（焼土跡）が確認された。2軒とも粘土（ローム）を混ぜた貼床と掘り方が認められ、床下には掘り方及び床下土坑が認められ、ローム混じりの土によって埋め戻されていた。また、2軒とも床面竈と南側には硬化面が認められた。なお、H-2号住居址の西壁には階段状の遺構が検出された。

遺物出土状況

H-1号住居址 覆土上層と床面直上及び竈とその右脇で土師器を主体とする土器群が大量に出土した。特に住居址中央部に出土の偏りがみられる。主な器種は土師器の壺、鉢、小形甕、台付甕、長胴甕、懶、須恵器の壺、蓋、甕である。完形個体も多数出土し、床面出土の土器には遺棄されたものも含まれると考えられる。編物石は覆土中から出土した。

H-2号住居址 H-1号住居址と同様大量の遺物が出土した。H-1号住居址では遺物は下層（床面）で多数出土したが、本住居址では下層はもとより、覆土上層からも多数出土した点に出土の違いが認められる。編物石は16区でまとまって出土した。

奈良時代の住居址

D区とE区において各1軒検出された。H-4号住居址は全体の1/3程度を確認したのみである。竈の両側は非対称形で、通常床面である左側がそのまま地面となっている。そのため、調査段階では重複として誤認した。2軒とも東竈で、貯蔵穴が竈右側、壁面に周溝がある。H-6号住居址は人為的に埋め戻されている。完掘されていないため構造は不明である。

平安時代の住居址

C区で1軒検出された。平面長方形である。掘り込みは浅い。柱穴は検出されなかった。覆土中に大量の礫が廃棄されていた。竈は東壁中央に設置されており、その部分は棚状の中段が検出された。土坑は竈右脇で検出された。竈の構造は簡素である。遺物は竈左側周辺で集中して出土した。

時期不明の住居址

H-3号住居址は、竪穴状の掘り込みをもつが、竈は検出されなかったが、住居址の一辺で焼土痕が確認されたため、住居址とした。床面中央で硬化面と粘土を確認した。遺物は覆土中で、ほとんど出土しなかった。

掘立柱建物址（第43図）

E区において1棟検出した。梁行2間×桁行3間以上の規模であるが、やや変形している。ピットは遺構確認面（Ⅲ層下部）から掘削されている。

竪穴状遺構（第43図）

A区で2基検出された。不整円形で掘り込みは、断面皿状である。遺物はほとんど出土しなかったが、T-1号竪穴状遺構では礫がまとまって出土した。時期、性格ともに不明である。

集石（第44図）

E区、B区、D区において各1基検出された。S-1号集石は覆土の状態から中世以降の所産と考えられる。S-2、3号集石は集石の隙間から平安時代の須恵器の片手、土師器の裏片が出土していることから、平安時代以降の所産と考えられる。両集石とも大形礫（安山岩）を集積し、小形礫が隙間に詰められていた。また、礫の表面が被熱していた。S-2号集石のみ浅い掘り込みが確認された。

土坑（第44図）

土坑はA区とB区で8基検出された。時期が特定できる土坑は、D-1号土坑のみである。他は古墳～古代以降の所産と考えられる。D-1号土坑は底面で焼土が確認され、覆土中から土師器の土器が出士した。D-18、20、21号土坑では土師器の土器片が出土している。また、D-23号土坑では古代の土器片が出土した。

（井上慎也）

住居址観察表

(単位: m)

住居名	平面形態	規模			壁構	主軸方向	土坑	柱穴	壁面	貼床	東		時期	備考	
		長軸	短軸	深さ							位置	構造			
H-1	中形正方形	5.62	5.65	1.08	全周	N-2°-W	右	4	4	○	○	北西/中央	B	I	竪溝辺と南側で硬化面。貯藏穴周辺にビット。
H-2	中形正方形	5.44	5.36	0.97	全周	N-2°-E	右	4	4	○	○	北/中央 東/南寄	B	I	拡張(建替)。北側竪溝辺と南側に硬化面。東に階段状遺構検出。南西隅床面で偏物石集中。
H-3	小形正方形	2.58	2.98	0.28	×	N-48°-E	×	×	不明	×	×	不明		不明	堅穴遺構。北東中央に統土有り。
H-4	小形	(1.50)	3.96	0.56	一部	N-84°-E	右	(2)	不明	×	○	東/中央	E	II	1/3確認。竪は地山を削りだして堅穴より奥に設置。
H-5	中形長方形	4.65	3.16	0.43	4/5	N-82°-E	右	×	不明	×	×	東/南寄	D	III	竪右脇に堅穴遺構。
H-6	中形正方形	4.58	(2.80)	1.25	全周	N-71°-E	右	×	(4)	壁間にビット	○	不明	B	II	約1/2調査。

凡例

時期 I期(律令期・飛鳥) II期(奈良) III期(平安)
平面形態 大形: 6m以上 中形: 4~6m 小形: 4m以下

竪構造 B: ローム+黒色土+袖芯河川縄

D: 地山削りだし+ローム+袖芯河川縄

E: 地山削りだし+ローム+袖粘土

掘立柱建物址観察表

(単位: m)

遺構名	桁行	梁行	規模(芯芯・m)		柱穴形態	柱穴深さ	時期	備考
			東西	南北				
HT-1	3間以上	2間	2.40以上	1.94	円形	0.3~0.4	III期以降	やや東西方向に歪有り

堅穴状遺構観察表

(単位: m)

遺構名	平面形態	規模			時期	備考
		長軸	短軸	深さ		
T-1	隅丸長方形	4.24	3.06	0.23	III	覆土中に多数の竪溝入。出土遺物無し。
T-2	円形	(3.42)	(2.30)	0.33	III	覆土中に竪と縦遺物が混入。

集石観察表

(単位: m)

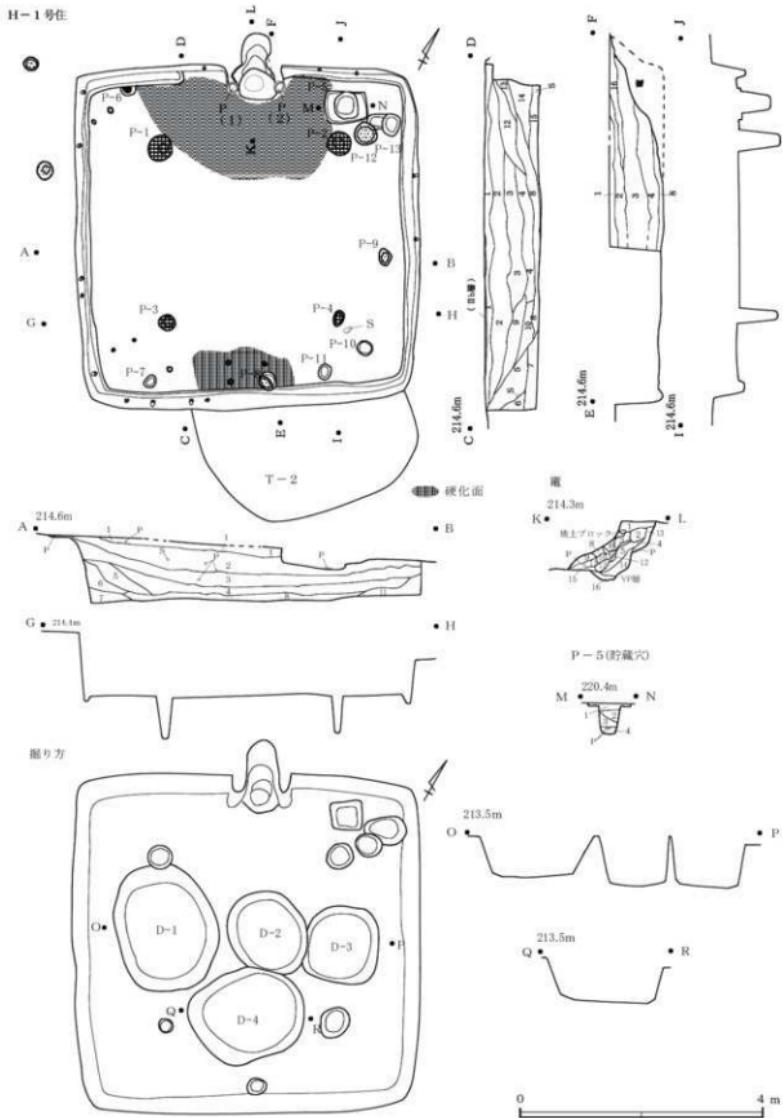
遺構名	平面形態	規模			石材	被烈	遺物	時期	備考
		長軸	短軸	深さ					
S-1	円形集積	(0.28)	0.29	—	×	安山岩	無し	III	I期に埋められていた。
S-2	円形集積	0.79	(0.40)	0.07	○	安山岩	土師器壺・瓶・瓦片	III	壺は床直。罐群の隙間に遺物混在。
S-3	円形集積	0.65	0.53	—	×	安山岩	一 壺 瓦片	III	瓦片は焚いた跡。

土坑観察表

(単位: cm)

遺構名	規模(上)		規模(下)		深さ	平面形態	断面	遺物	時期	所見	
	長軸	短軸	長軸	短軸							
D-1	224	—	—	—	29~110	不整形	柱穴状	土師器井等	I期	浅い底面に燒土帆。柱状のビットが重複する。	
D-9	38	34	29	19	13	円形	皿状		古代以降	ビット	
D-11	69	63	35	34	12	円形	皿状		古代以降		
D-18	131	86	94	54	36	楕円形	皿状		古代以降		
D-19	84	77	69	68	16	円形	皿状	罐	古代以降	底面で大形罐出土。	
D-20	76	61	61	44	30	円形	皿状	土師片	古代以降		
D-21	—	—	—	—	円形	柱穴状	土師片		古代以降	H-T-1の柱穴	
D-23	75	58	46	37	16	円形	皿状	土師片	古代以降		

第4表 古墳～平安時代遺構観察表



第36図 H-1号住居址実測図（1）

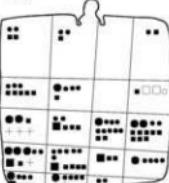
遺物名	層番	色調	しまり	形状	遺 大 物				備考	
					R	P	H	V		
H-1	1 黒褐色土器	○	△	△	×	×	△	-	△	△=R.G.
	2 黒褐色土器	2<1 ○	△	△	●	●	△	△	○	上層
	3 灰褐色土器	○	△	△	○	○	△	○	×	中層、削れ木と板上、ロームブロックが多く混入
	4 灰褐色土器	4<3 ○	△	△	○	○	△	○	×	中層下部、削れ木と板上、ロームブロックが多く混入
	5 灰褐色土器	31<10 ○	△	△	●	●	△	△	○	△=1号土器、△=10号土器
	6 黑褐色土器	5<10 ○	△	△	●	●	△	△	○	細見層
	7 黑褐色土器	6<7 ○	△	△	△	△	△	△	×	黒褐色土器△(赤質)
	8 黑褐色土器	4<8 ○	△	△	△	○	○	●	×	黒褐色土器△(赤質)
	9 灰褐色土器	○	△	△	△	△	△	△	×	△=4層に限る
	10 灰褐色土器	30<9 ○	△	△	△	△	△	△	×	△=15層以降、底土、層はほとんどない
	11 灰褐色土器	8<11 ○	△	△	△	△	△	△	×	△=4層に限る
	12 灰褐色土器	32<4 ○	△	△	△	△	△	△	×	△=4層に限る
	13 灰褐色土器	32<13 ○	△	△	△	△	△	△	×	△=4層に限る
	14 黑褐色土器	8<11 ○	△	△	△	△	△	△	×	△=4層に限る
	15 黑褐色土器	○	△	△	△	△	△	△	×	△=4層に限る
	16 黑褐色土器	2<16 ○	△	△	△	△	△	△	○	黒褐色土器△(赤質)
Ⅲ	2 番(赤)褐色土器	1<2 ○	△	△	△	△	△	△	○	標準
	3 塗装土器	○	△	△	△	○	○	○	○	標準
	4 灰褐色土器	3<4 ○	△	△	○	○	○	○	○	標準土器(灰質)
	5 番(赤)褐色土器	5<3 ○	△	△	△	△	△	△	○	標準内、赤物△
	6 塗装土器	○	△	△	△	○	○	○	○	標準内、赤物△
	7 灰褐色土器	10<7 ○	△	△	△	△	△	△	○	標準内、赤物△
	8 塗装土器	8<8 ○	△	△	△	△	△	△	○	標準内、赤物△
	9 灰褐色土器	9<8 ○	△	△	△	△	△	△	○	黒色土△、砂利混入
	10 黑褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	10時に限る
	11 黑褐色土器	30<11 ○	○	○	○	○	○	○	○	底土(黒褐色土)
	12 黑褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	13 黑褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	14 黑褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	15 黑褐色土器	34<13 ○	○	○	○	○	○	○	○	○
	16 黑褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Ⅳ-2	1 黑褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(II層)	2 黒褐色土器	2<3 ○	△	○	△	×	△	○	○	○
	3 黑褐色土器	2<3 ○	△	△	△	○	○	○	○	○
	4 灰褐色土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○

遺物分布

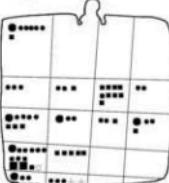


上層：20～30cm
中層：10～20cm
下層：10～20cm
床：0～10cm

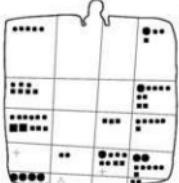
上層



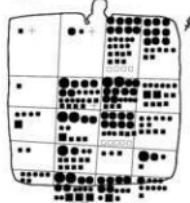
中層



下層



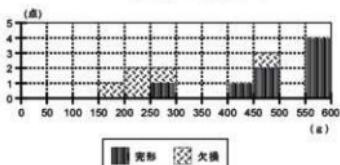
床直



IIIC型
IIIC型
D-1
P-2
P-3
P-12
面
サブレ
サブレ
P-5

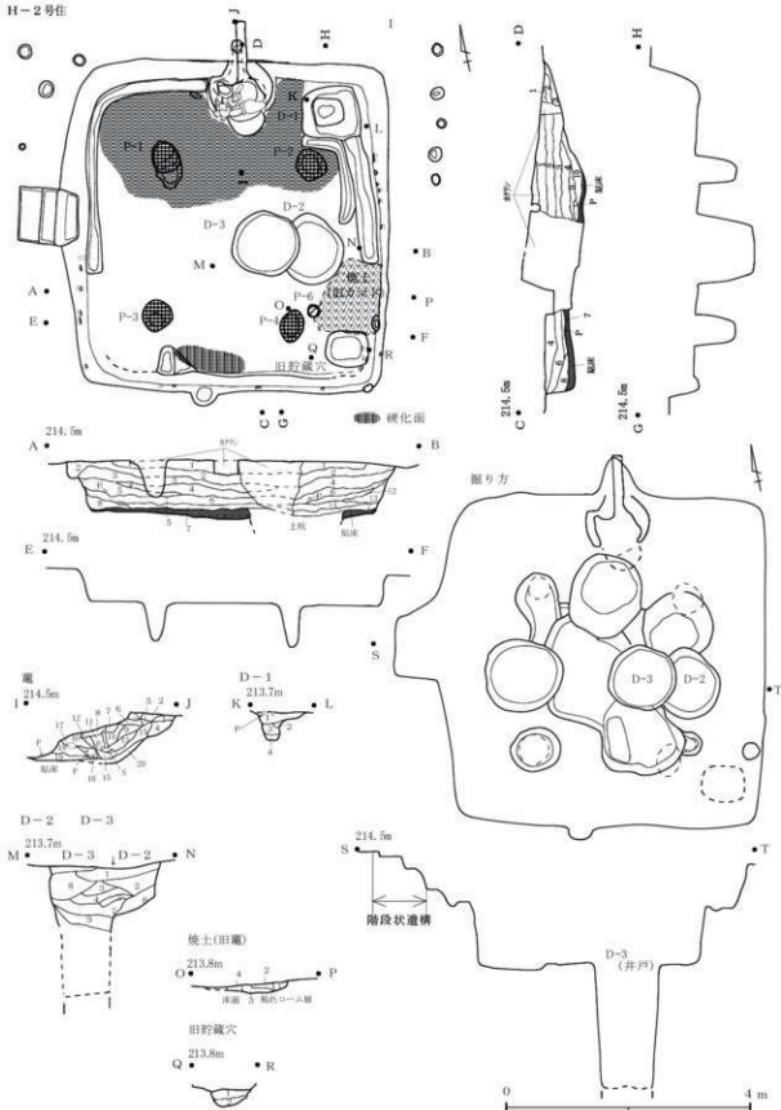
10g 100g 1000g
+ 鹿骨石 上層器皿系
田 猪石 上層器皿系
■ 台石 中古器皿系
△ 磐石 亂石
□ 四石 黑古器皿系
▲ その他

H-1号住居址石重量度分布



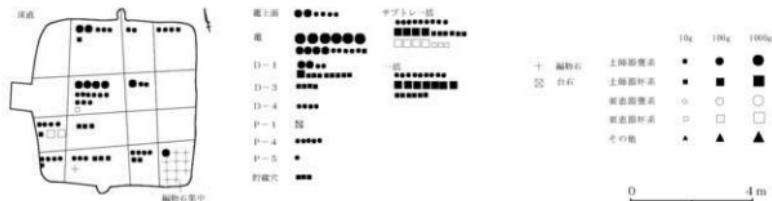
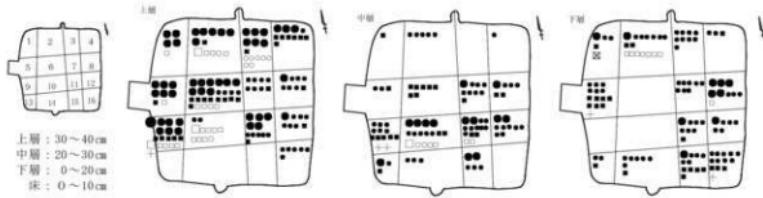
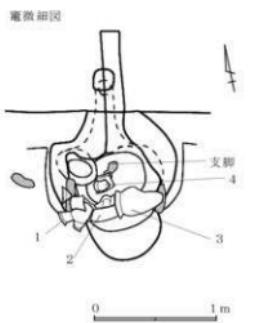
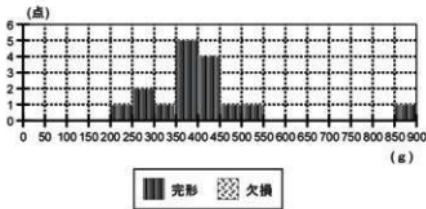
0 100 200 300 400

第37図 H-1号住居址実測図（2）



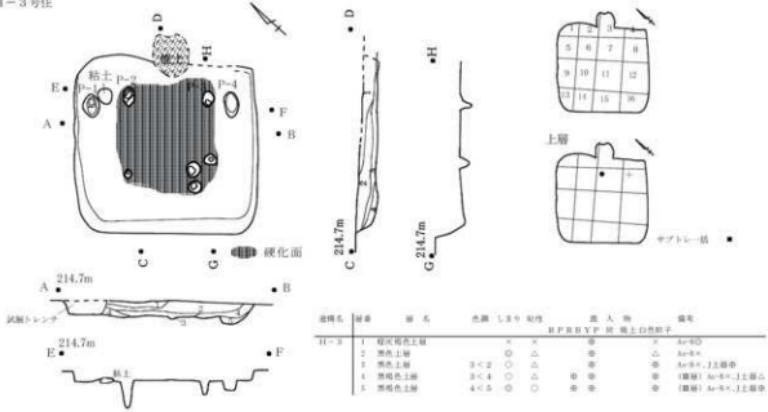
第38図 H-2号住居址実測図(1)

H-2号住繩物石重量度数分布

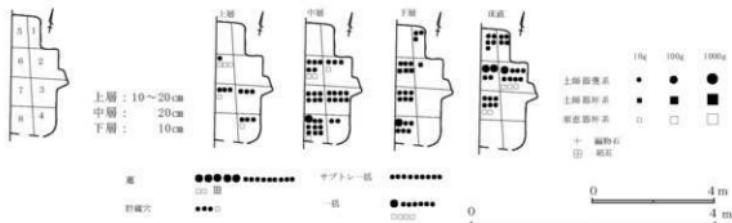
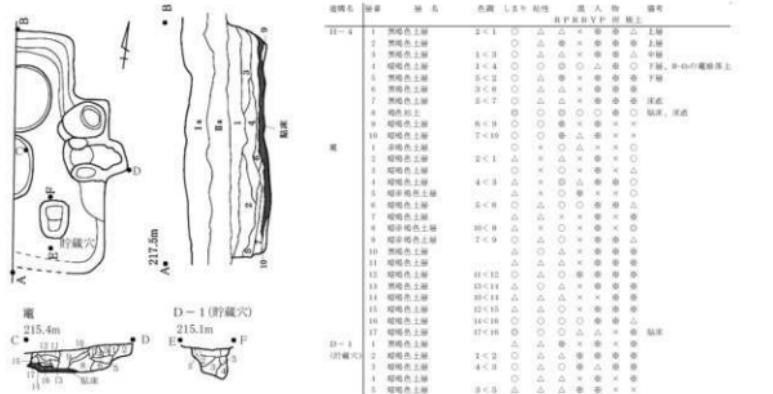


第39図 H-2号住居址実測図(2)

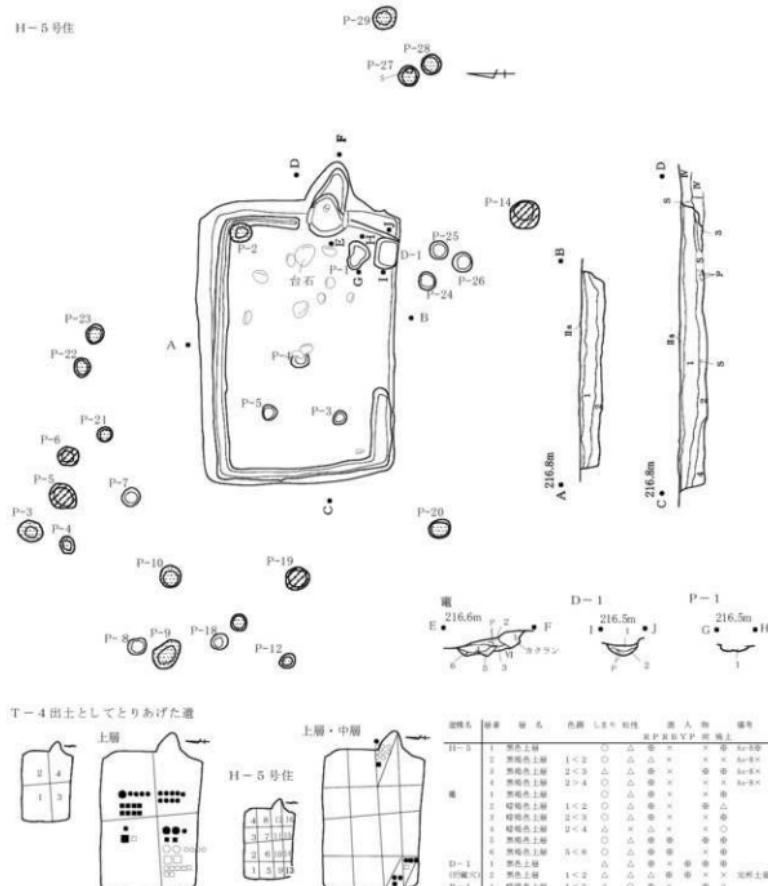
H-3号住



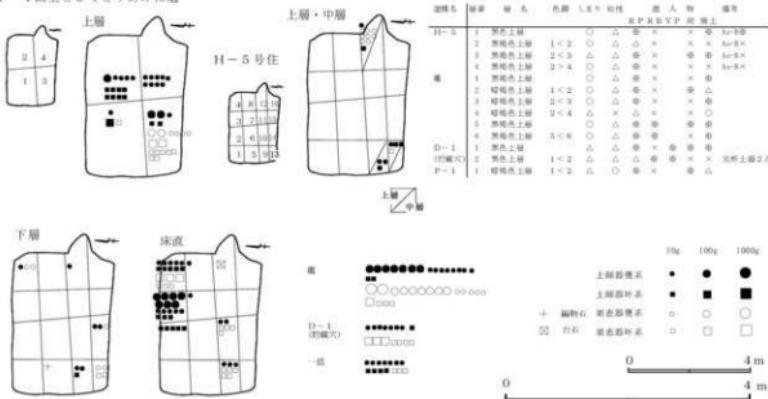
H-4号住



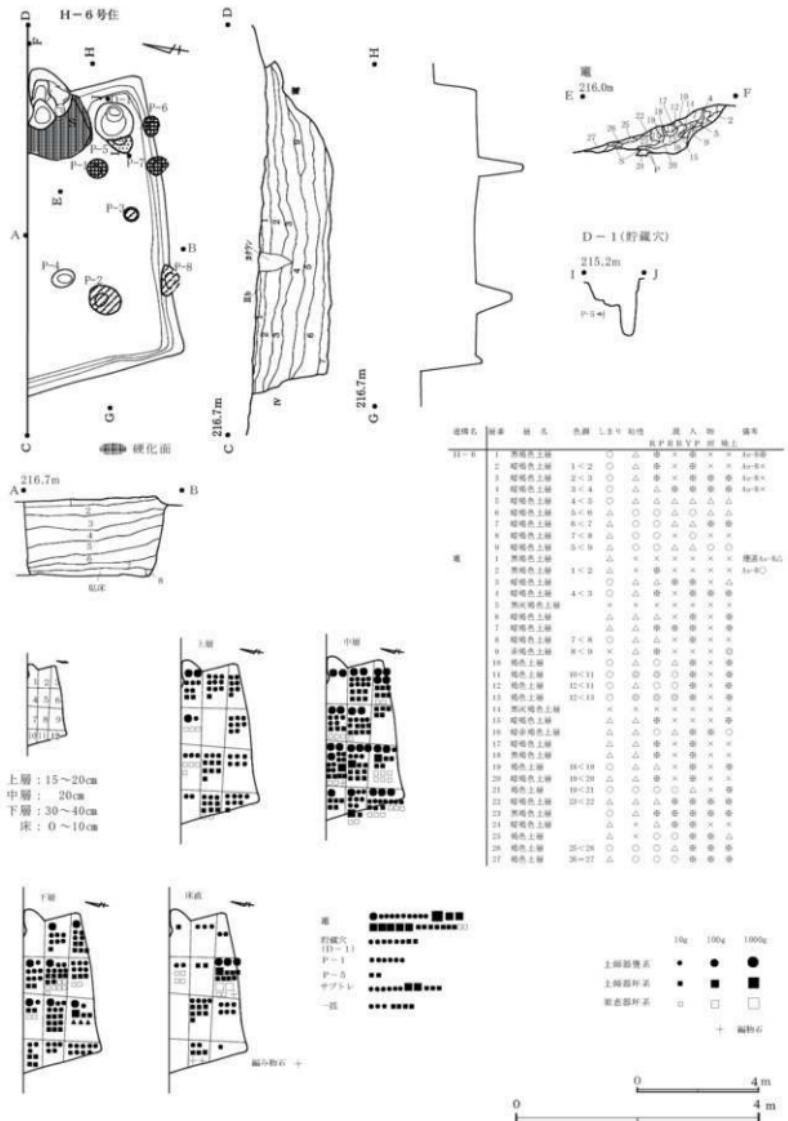
第40図 H-3号・H-4号住居址実測図



T-4 出土としてとりあげた遺

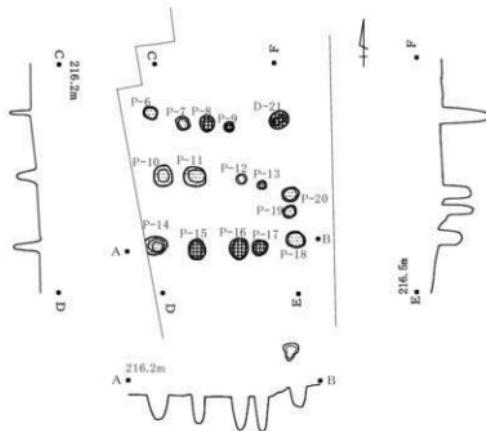


第41図 H-5号住居址実測図

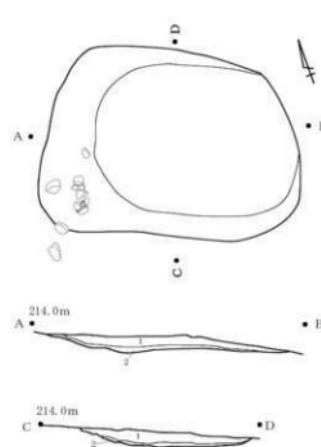


第42図 H-6号住居址実測図

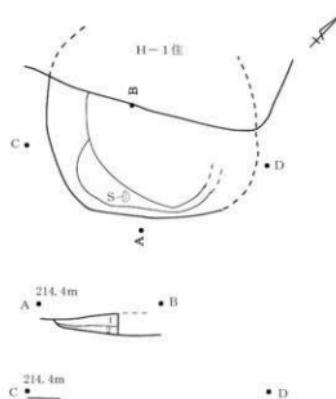
HT - 1



T - 1



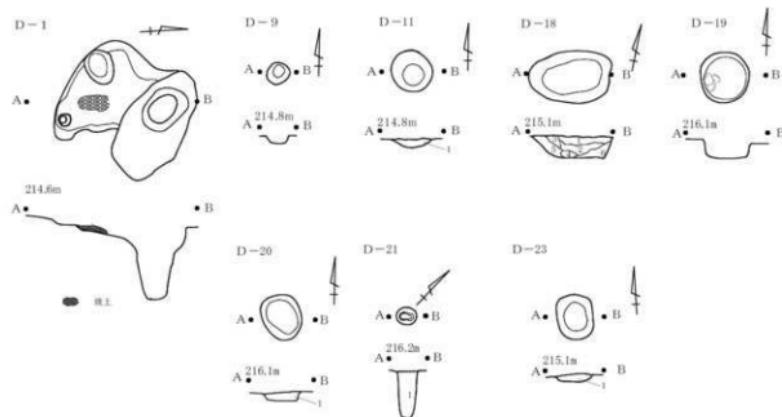
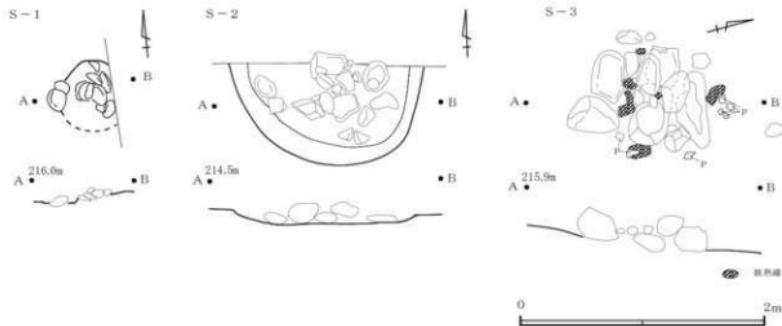
T - 2



遺構名	編番	基部	層	性質	L.S.N	柱	人	物	備考				
							R	P	B	H	V	F	施上
T-1	1	黑色土層		○	×	●	+	+	+	+	+	+	Ar-△砂質層
	2	黑褐色土層	1 < 2	○	△	+	+	+	+	+	+	+	Ar-△砂質層
T-2	1	黑色土層		○	+	●	+	+	+	+	+	+	Ar-△砂質層
	2	黑色土層		○	△								Ar-△砂質層



第43図 HT-1号掘立柱建物址・竪穴状遺構実測図



地塊名	断面	層	先端	上部	地塊	侵入物					
						R	P	B	R	P	侵入物
D-11	1	黑色土層		○	△	●	●	●	●	●	●
D-18	1	黑色土層		○	△	△	●	●	●	●	●
	2	黑色土層	2<1	○	△	●	●	●	●	●	●
	3	黑色土層	2>3	○	△	●	●	●	●	●	●
	4	黑色土層	2<2	○	△	●	●	●	●	●	●
	5	黑色土層	2>5	○	○	●	●	△	●	●	●
	6	黑色土層	2<5	○	○	●	●	△	●	●	●
D-19	1	黑色土層		△	×	×	×	×	●	●	●
D-20	1	黑色土層		△	×	×	×	●	●	●	●
D-21	1	黑色土層		△	×	×	●	●	●	●	●
D-23	1	黑色土層		○	△	●	●	●	●	●	●



第44図 集石・土坑実測図

2. 遺物

土器

H-1号住居址出土の土器（第45図～第47図）

土師器の壺、鉢、小形壺、台付甕の脚部、小形甕、甕、須恵器の壺、壺蓋、甕が出土した。破片が主体だが、完形個体も比較的多く出土した。土師器の壺は器高が低く口縁部が内湾するもの（1～6）、須恵器模倣壺（7）である。須恵器は口縁部がやや直立気味の壺、壺蓋がある。甕は長胴化したもので、口縁部が大きく外反する。表面調整は胴上半部が縦方向のヘラケズリで、下半部が斜めあるいは横方向のヘラケズリである。内面調整は横あるいは斜め方向のヘラナデである。須恵器の甕片は内面同心円印を施す。7世紀終末～8世紀初頭の土器群である。

H-2号住居址出土の土器（第48図）

土師器の壺、甕、須恵器の壺及び壺蓋、甕が出土した。竈に転用された甕はほぼ完形である。土師器の壺は口縁部が内湾する。須恵器の壺及び壺蓋は内外面共にロクロ整形であり、底部の切り離しはヘラ切り無調整である。甕はH-1号住居址のものと同一形態である。7世紀終末～8世紀初頭の土器群である。

H-4号住居址出土の土器（第49図）

須恵器のロクロ整形による壺と土師器の胴部が膨らむ甕である。壺の切り離し痕がヘラおこしである特徴から8世紀後半の土器群である。

H-5号住居址出土の土器（第49図）

須恵器を主体とする土器群である。3の土師器壺（模倣壺）は混入したものである。須恵器は壺、高台付碗、高台付皿である。底部切り離しは回転糸切りで無調整である。8の甕は胴部が脹らみ口縁部が外反する。厚さが薄い。表面調整は上半部が縦方向のヘラケズリ、下半部が斜め方向のヘラケズリである。内面調整は横と斜め方向のヘラナデである。須恵器の甕は下半部のみであるが頸が長く外反する形態と考えられる。高台付皿が組成し、コの字口縁の甕が無いことから9世紀後半の土器群である。

H-6号住居址出土の土器（第50図）

土師器の壺、須恵器の壺、高台付甕、甕が出土した。土師器の壺は口縁部と体部との境が明瞭ではなく、口縁がやや直立する形態である。須恵器の壺はロクロ整形で底部切り離しが回転ヘラ切りで無調整である。5・6は甕の底部及び脚部と思われる。須恵器の甕は内面同心円印を施す。8世紀後半の土器群である。

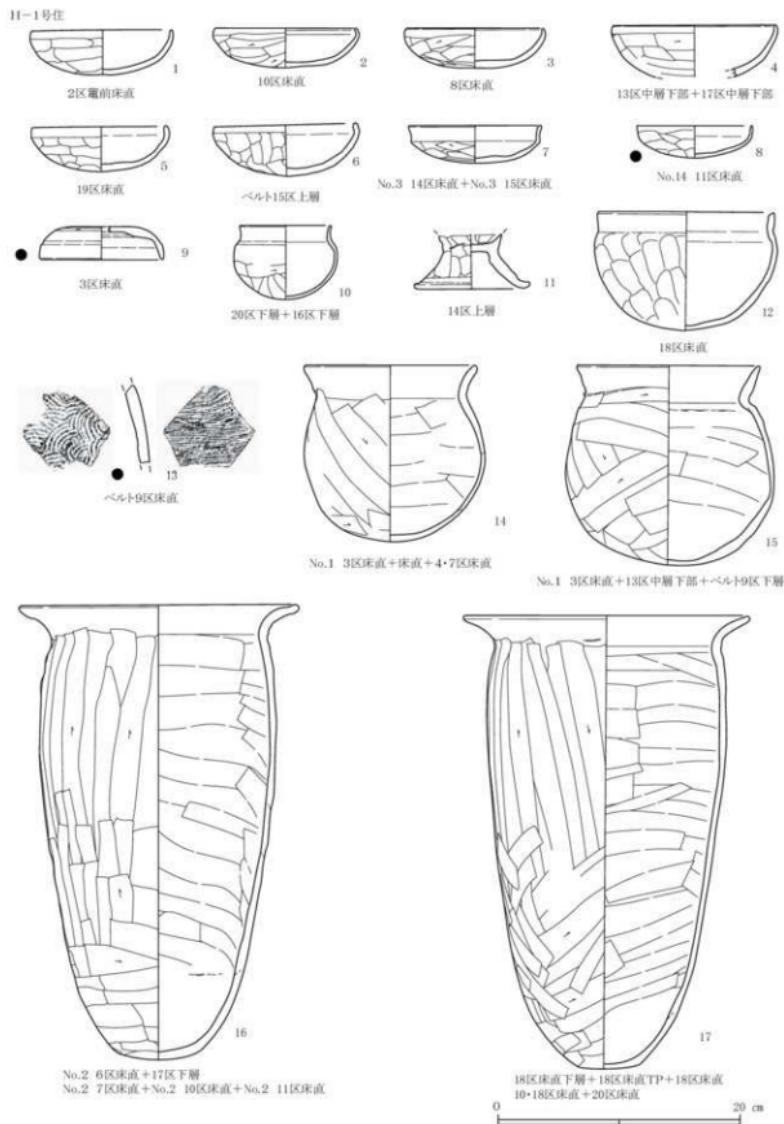
その他の遺物（第50図）

9は鉄製刀子、10は鉄製鎌と考えられる。11は中心が空洞であるが器種は不明である。12～15は鉄滓である。16は、黒色付着物のある粘土製羽口で円筒状を呈する。17は用途不明の軽石である。縄文時代の可能性もある。18は砥面をもつ敲石である。19は砥石、20は台石である。21は土錘である。

編物石

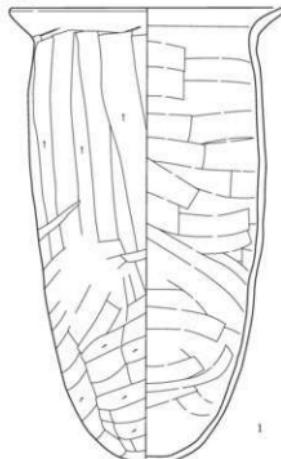
H-1号住居址で15点（内欠損6点）、H-2号住居址で16点（内欠損1点）が出土した。石材は全て細長い安山岩である。大きさの平均値は、H-1号住居址で長さ123.3mm、幅75.9mm、厚さ41.0mm、重量506.1g、H-2号住居址で長さ118.1mm、幅60.0mm、厚さ41.7mm、重量407.9gである。

（井上慎也）



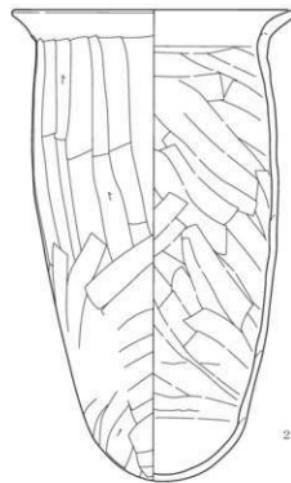
第45図 H-1号住居址出土土器実測図(1)

H-1号住



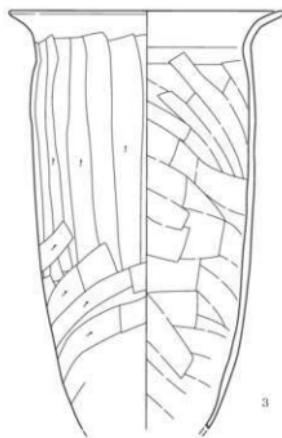
1

No.2 6区床直 + No.2 7区床直



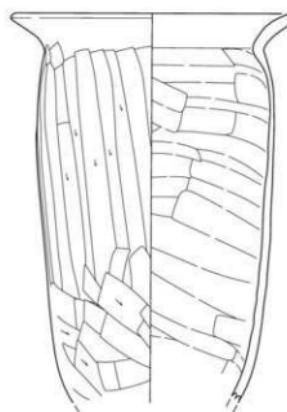
2

No.3 14区床直 + No.3 15区床直
12区床直



3

No.5 19区床直 + No.4 16区床直
D-1 5隔壁面 + 7+11区床直
15+17区下層 + 蓋上面



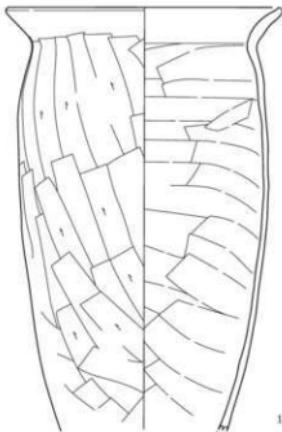
4

蓋左袖1

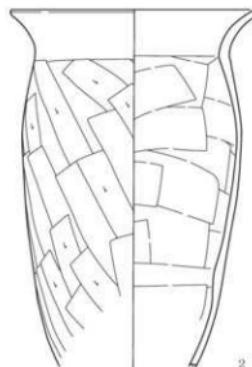
0 20 cm

第46図 H-1号住居址出土土器実測図(2)

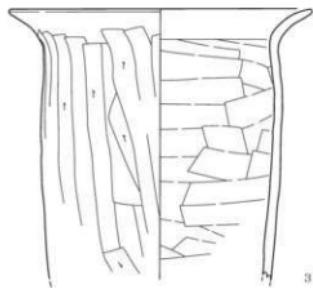
H-1号住



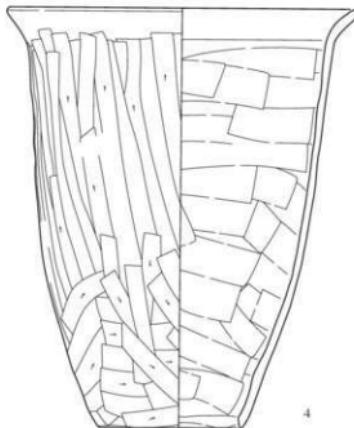
No.2 7区床直+No.4 16区床直
4区床直+10区床直+4区下層
4-8区床直+覆1区5層
P-5上面4層+P-2下層



竈右袖2



4区床直+8区床直+17区中層下部

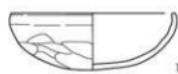


No.1 3区床直+No.2 11区床直
No.2 6区床直+17区下層
7区床直+11区床直

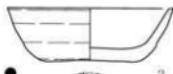
0 20 cm

第47図 H-1号住居址出土土器実測図(3)

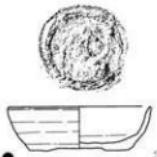
H-2号住



D-1上面4区



サブレ10区上層



3



4



9区床直



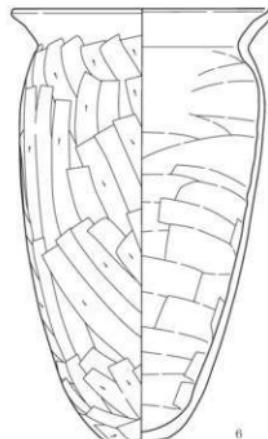
9区床直



5C区3層

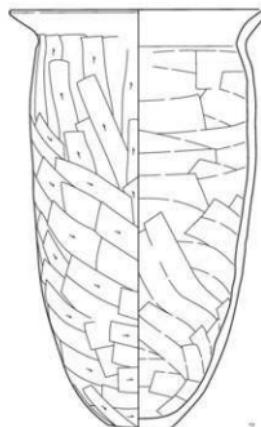


5



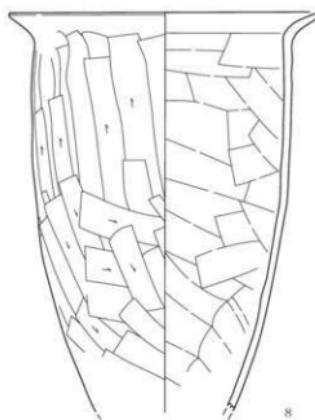
6

竪3



7

竪2+3

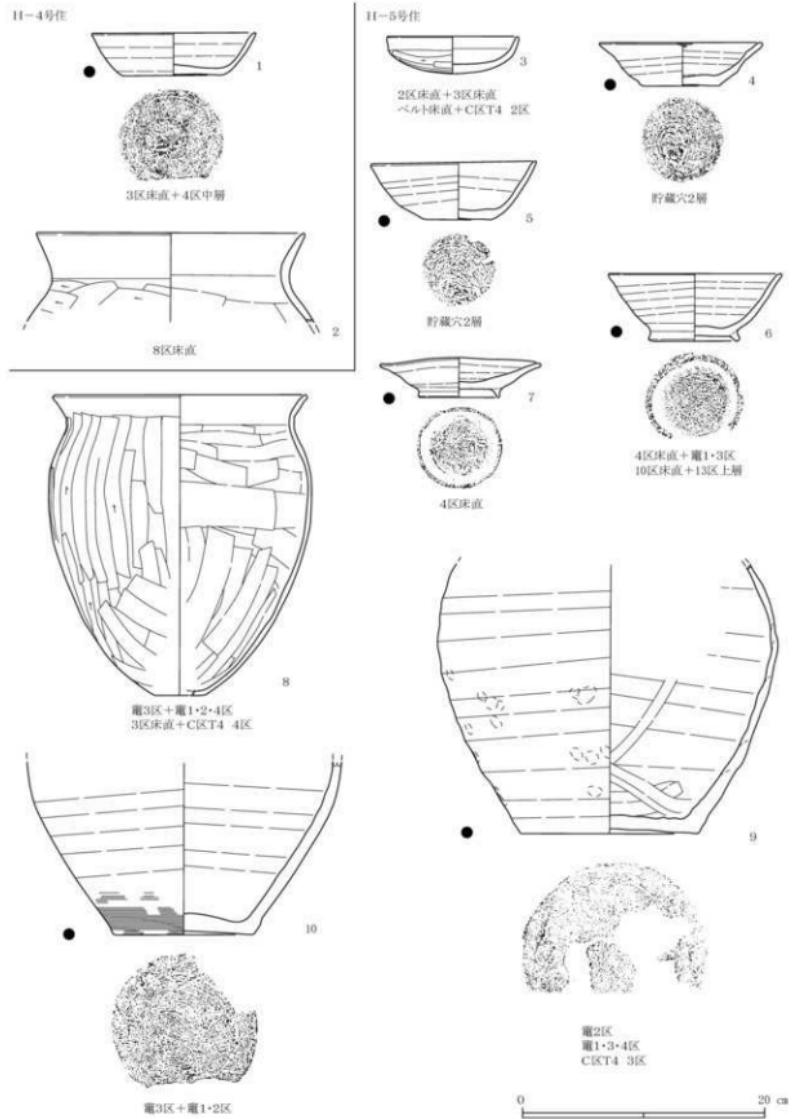


8

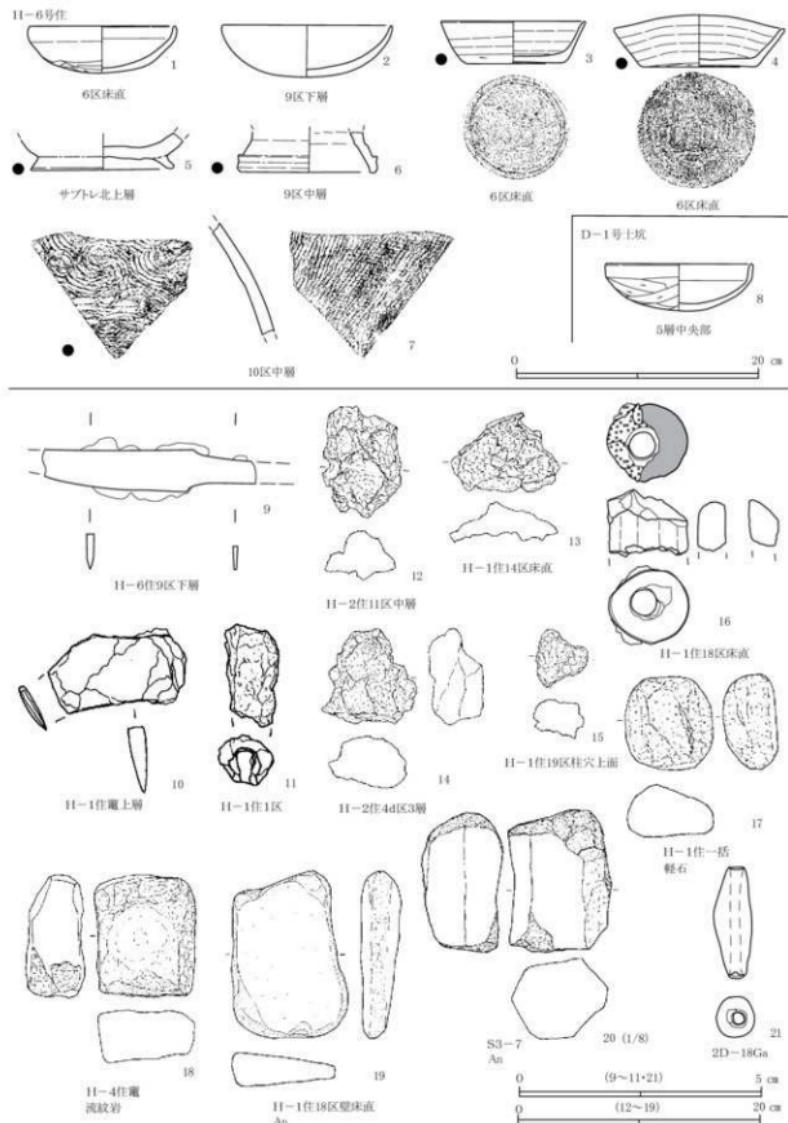
竪1+竪



第48図 H-2号住居址出土土器実測図



第49図 H-4号・H-5号住居址出土器実測図



第50図 H-6号住居址・土坑出土土器・その他の遺物実測図

（4）中世の遺構と遺物

1. 遺構

窯体（第51図）

KM-1号窯址

C区において、窯址を1基検出した。試掘段階で一部を破壊してしまったが、Ⅲ層上面で焼土及び粘土（ローム）が集中する範囲を確認した。II区において、中世の窯址が確認されていたことから、同様の遺構として認識した。遺構は、潰れた状態で検出された。規模は窯体（燃焼室）で、上面の長軸及び短軸1.1m、底部の長軸0.9m、短軸0.8m、深さ0.4mである。構造は平面円形に振り込み、奥壁に安山岩の礫を縦に並べ、隙間を土器片で動かないように調節している。裏面（内側）はローム（粘土）を貼り込んでおり、窯体を構築している。内面はローム（粘土）混入土で埋まっており、中にはかわらけ等の土器片が混入していた。壁面は被熱により赤化していた。II区の窯体と同様、ドーム状であった可能性が考えられる。燃焼室のみ確認し、焚き口部分からの付帯施設は確認されなかったが、遺構周辺が浅く振り込まれている状態を確認した。また、遺構周辺で円形に並ぶピットが検出されたが、現段階では窯址に伴うかは不明である。

窯内からは、かわらけが少なくとも5個体以上を出土しているおり、完形品も含まれていることから、かわらけを焼くための窯であった可能性が考えられる。

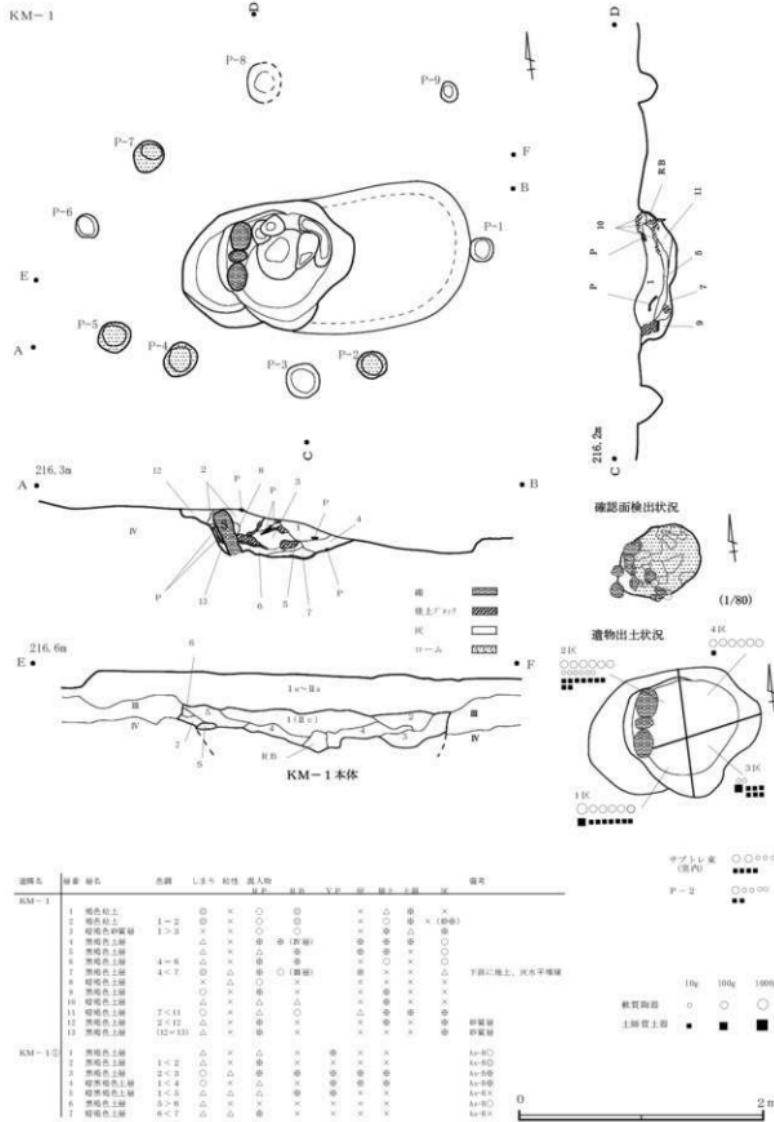
2. 遺物

KM-1号窯址出土の土器（第52図）

土師質土器皿（かわらけ）、瓦質陶器（内耳土鍋等）、擂鉢、鉢、甕等が出土した。かわらけ以外は全て破片で、窯体への二次転用されたもので、焼成品ではない。かわらけは15世紀中頃のものも含まれており、II区の窯址出土遺物（15世紀末～16世紀初頭）に比べ、やや年代が古い。

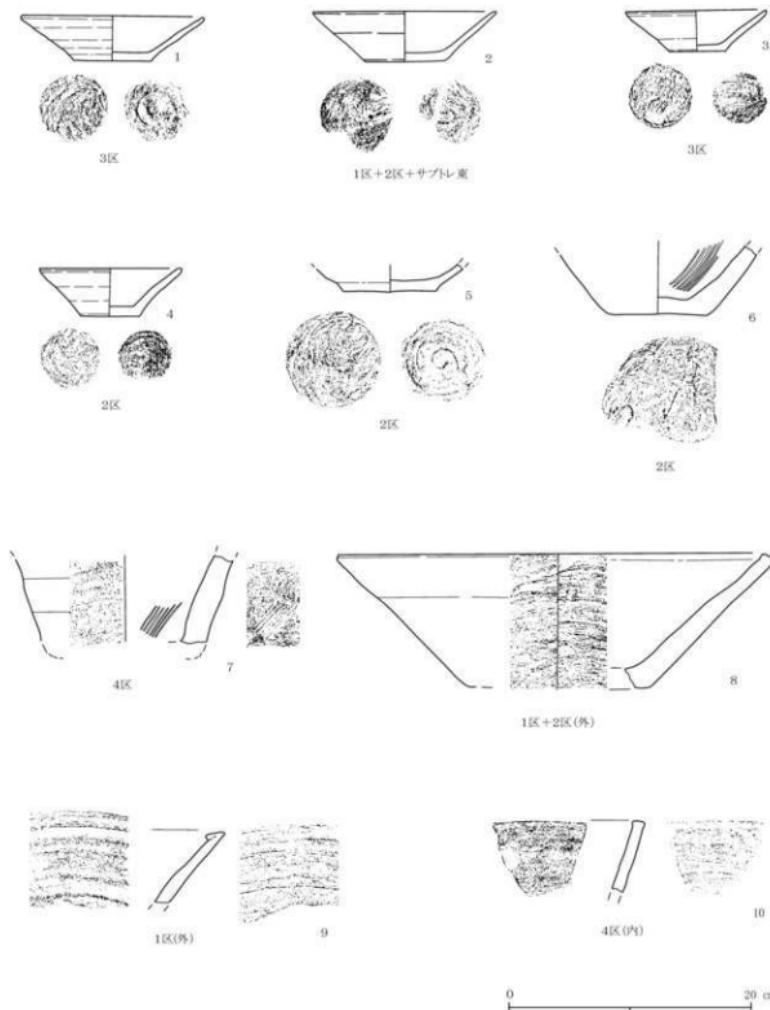
（井上慎也）

KM-1



第51図 KM-1号窯址実測図

KM-1号窯址



第52図 KM-1 窯址出土土器実測図